©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

研究報告

桃源瑞仙年譜稿

今泉淑夫

はじめに

かつて新村出は、桃源瑞仙の事蹟を論じて次のように評した。[1]

たゞ桃源が儒学に於て卓見を有したるにもあらず、禅機の上に大いに秀でたる所あるとも見えず、又詩文に傑出したるにてもなく、帷幄に参したるにてもなく、而も蔚然たる当代の五山英衲の間に伍して名望を保ち得たといふのは、後学を導いて講学倦むことを知らざりし真摯の徳に由つたので、その丁亥の乱を避けて江州山上の山寺に詫住ひしたをり、貧と病とに処して、書を講じ書を抄したあたりなどを読むと、古人苦学の状を想見せしめ、所謂懦夫を起たしめる心地がする。従って、其事蹟は単に講学者としての事蹟に止まり、波瀾あり、光彩あるといふわけにはゆかぬが、さりとて一村学究を以て目することは出来ぬのである。

明治三十九年十一月のこの論考は、桃源像の輪郭を浮彫りにした好論として知られる。近年、大日本史料延徳元年十月二十八日、死歿条にその伝記史料が収録される。また抄物研究の側からは、代表作『史記抄』が中世口語の宝庫として全文の翻刻、写本の写真複製がなされ、これに関連して作者の事歴にも言及されることが少なくない。[2] 他に儒学史、史学史の立場からの論考がある。[3]

私見によれば、新村のいわゆる「懦夫を起たしめる心地」もさることながら、「さりとて一村学究を以て目することは出来ぬ」ところを確認してゆくことによって、五山の学僧が直面した諸問題を腑分けするべき糸口を見出しうる筈である。たとえば桃源の名望が「後学を導いて講学倦むことを知らざりし真摯の徳」によるのであるとして、徳のほうではなく、その導き方に注目することで、桃源の思想性とその時代の諸特質が顕在化しているところを見なければならないであろう。

桃源瑞仙には、近侍する僧の指導について、僧の習学意図が学にあって道に在らざるからは、敢えて修道を強制して彼を粥飯の僧たらしむべからず、という注目すべき言がある。『百衲襖』十八に「二三子其志唯在于学、而不在于道、若強使之、則長他無明而已矣、余孰計之、不可使為粥残飯僧矣」というのである。

これは室町期五山僧についての、僧は修道のためにこそ寺中に属して、外典等の学習はその手立てにすぎない、とみる常識に大きく離反する。これまでの桃源に限らず五山文学に関する論考の殆んどがこの常識を暗黙の前提とする。例外的に玉村竹二「五山の仏教と儒教」[4]が「五山の禅林にはほとんど仏教がない」として、諷誦作法、仏事法要を別とす

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

れば、その薫育は中国的な学藝教養に限られることを強調する。

同書は五山のこの精神的風土を端的に象徴する人物として、翺之惠鳳、景徐周麟、月舟寿桂と共に桃源の名を挙げる。翺之は桃源の友人であり、他の二人は桃源の門人である。[5] 修道によってではなく学によって五山叢林を見通すために、桃源の存在は看過することができない。以下に年譜[6]を作製してその作業のための序論としたい。[7] 桃源の習学期の勉強の様子及び永源寺山中での門人たちに対する指導とその学習内容は、桃源とその周辺の学僧の関心が修道というよりは儒学を中心とするいわゆる外典の学習へと向かっていたことを明らかにしている。桃源らの知的関心とこれに関わる五山内部の潮流は、たとえばすでに関東において半ば寺院から独立して儒学の修学を目的として再興以来二代にわたる活動の実績を示していた足利学校の活動に対応するものである。[8] かかる系譜をみる上でも桃源の年譜は私的な記録にとどまらぬのである。

(1) 新村出「桃源瑞仙の事蹟」(史学雑誌、第十七篇第十一・十二号)

(2) 三ケ尻浩「漢文和読史上ヨリ見タル室町時代ノ抄物ニ就テ」昭和十二年／同「史記抄解題」昭和十三年／湯沢幸吉郎『室町時代の言語研究』昭和三十三年／大塚光信「史記抄の諸本と本文」(国語国文、昭和三十九年五月)／同「史記抄について」(『抄物資料集成』第七巻所収、昭和五十一年)／寿岳章子「史記抄の文章」(『室町時代言語の表現』所収)／『漢書列伝竺桃抄』解題(柳田征司)(昭和四十三年)／亀井孝・水沢利忠『史記桃源抄の研究』昭和四十年

(3) 上村観光「史記抄の著者桃源瑞仙」(『禅林文芸史譚』所収、大正八年)／足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』(昭和七年)／芳賀幸四郎『中世禅林の学問および文学に関する研究』昭和三十一年／大島利一「桃源瑞仙の史記抄を読む」(東方学報、昭和十四年五月)／蔭木英雄「桃源瑞僊の史学—史記抄を中心として—」(東洋文化、昭和四十五年四月)

なお桃源の近江における生活を伺うための参考文献としては、『近江愛智郡志』巻一(昭和四年)、佐々木杜太郎『小倉実澄傳』(昭和四十六年)、『新修大津市史』第二巻中世(昭和五十四年)、『八日市市史』第二巻中世(昭和五十八年)、『大日本史料』第八編之一、同補遺第八編之一、同二十九等がある。

(4) 古川哲史・石田一良編『日本思想史講座2、中世の思想1』所収(昭和五十一年)

(5) 翺之の詩文集『竹居清事』の諸本と翺之周辺の問題について、今泉「翺之惠鳳小考」(日本歴史、昭和五十七年五月)／同「翺之惠鳳小考訂正」(日本歴史、昭和五十七年十一月)、景徐については朝倉尚の一連の論考がある。

(6) 以下の年譜本文では次の略号を用いた。

〔百〕＝百衲襖 (〔百〕八＝百衲襖第八冊)／〔翰〕＝翰林葫蘆集／〔梅花〕＝梅花無尽蔵／〔外集〕＝小補東遊外集／〔史〕＝史記抄／〔竺桃抄〕＝漢書列伝竺桃抄／〔碧山〕＝碧山日録／〔雲桃鈔〕＝勅修百丈清規雲桃鈔・勅規桃源鈔／〔東〕＝永源寺本 小補東遊集／〔大谷本 小補〕＝大谷大学図書館本小補東遊集／〔後集〕＝小補東遊後集／〔続集〕＝小補東遊続集／〔前集〕＝補庵京華前集

(7) 桃源の事跡を論ずるのに『百衲襖』『史記抄』を避けて通ることはできないが、筆者はこの方面の知識に欠けて、所謂漢籍に啄を容れる資格がない。従って以下に言及するところは易経ないし史記に関するその内容考証ではなく、抄として記述されてある所を、桃源という室町期学僧の伝記史料とするに許容されうるであろう部分ないしは文献としてのそのレベルでの引用検討である。しかもなお筆者の引用言及する所に誤りがあることを惧れる。

『史記』の文章がどれほどに司馬遷のものであるか、史記の叙述するところがどこまでが史実であるかという問題は、戦国期列伝と『戦国策』の関係、あるいは宮崎市定が「史記李斯列伝を読む」で深読みしてみせた李斯上奏文の史料的性格などから推して、史記学のごく専門的課題にあたる。これらの問題に桃源の史記抄がどれほどの貢献をなしうるか、それも史記学内部の問題である。このレベルで史記抄の内容を検討するのは我々の任ではない。仮りに桃源がこれに類する課題に言及するとしても、我々

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

にとってはそれらの記述の中から史記学外に属する要素を摘出することに留意すべきであろう。同様のことは『百納襖』の易学研究についてもいえる。予め記して、読者のご示教を乞う。

(8) 今泉「足利学校学徒表稿」(日本歴史、昭和五十九年一月)参照。

年譜

永享二年(一四三〇)(庚戌)(一歳)

六月十七日、近江国佐々木京極氏ノ臣市村某(法名年登居士)ノ子トシテ生ル(1)〔百〕八

永享三年(辛亥)(二歳)

生母病歿ス、以後岩桂慈昌尼ニ養育セラル(2)〔百〕二十二〔翰〕三

永享五年(癸丑)(四歳)

市村慈雲院ニ出家シ、同開基斉岳禅師ニ愛育セラル、コノ頃父年登居士後妻ヲ迎フ、異母弟二人、同妹一人アリ(3)〔百〕十八・十九・二十二〔翰〕

永享十三年(辛酉)(十二歳)

相国寺明遠俊哲ノ室ニ入ル、万里集九・横川景三マタコノ年相国寺ニ掛籍ス(4)〔梅花〕〔外集〕

文安二年(乙丑)(十六歳)

コノ頃、竺雲等連・瑞溪周鳳ニ就キ、諸学ヲ学ブ(5)〔百〕十三

享徳二年(癸酉)(二十四歳)

建仁寺正宗雅蔵主ニ人天眼目・碧岩集ノ講義ヲ受ク(6)〔史〕日者列伝〔臥雲日件録〕

康正元年(乙亥)(二十六歳)

コノ頃周易ノ学習ヲ志シ、関係書抄ヲ買漁ル、是ヨリ先、僧宗瑞ノタメニ大惠書ヲ講ズ(7)、マタコノ頃永源寺ニ遊ブ(8)〔百〕八・二十三〔大谷本小補〕

長禄三年(乙卯)(三十歳)

五月、竺雲ニ漢書講義ヲ受ク、コノ頃、牧中梵祐ニ史記講義ヲ受ク(9)、マタ春ヨリ雲章一慶ノ勅修百丈清規講義ヲ受ク〔史〕〔竺桃抄〕〔碧山〕〔雲桃鈔〕

寛正三年(壬午)(三十三歳)

八月十日、雲章ノ清規講義ヲ終功ス(10)〔雲桃鈔〕

応仁元年(丁亥)(三十八歳)

八月二十四日、乱ヲ近江ニ避ケルベク、横川ト共ニ旅立ツ、坂本ニ到リ、及晩舟行柳浜ニ向フ、途中、賊ヲ惧レテ下舟、一宿ス〔東〕〔大日本史料〕第八編之一・二十九

八月二十五日、堅田浦ニ到ル、舟師ノ父母迎ヘテ一行ヲ留ム、舟ヲ出スモ賊ニ遭ヒ、舟ヲ繋ギテ舟師去ル、止ムナク舟師ノ家ニ到リ宿ス、夜聯句アリ〔東〕

八月二十六日、暁ニ到リ暴雨、桃源、行賂ヲ以テ舟師ヲ説キ、賊数人ヲ誘ツテ舟行ヲ護ラシム、午ニ及バズ雨晴レテ風起ツ、横川舟酔ス、兵主ニ到リ下舟、安楽寺ニ月翁周鏡ヲ訪フ、聯句二百韻アリ〔東〕

八月晦日、安楽寺ヲ辞シ、市村ニ向フ、途中前河ニ到リ、借馬ヲ還ス、ソノ地ニ迎ヘアリ、夕刻市村慈雲庵ニ到ル〔東〕

九月一日、慈雲庵開基忌日、斎会ヲ営ム〔東〕

九月六日、大慈庵祥岩翁来訪、横川ニ草案ヲ示ス〔東〕

九月九日、重陽ヲ賞シテ、横川、詩ヲ桃源ニ呈ス〔東〕

九月十三日、十三夜ノ月ヲ賞ス、日本ノ十三夜賞月ノ習俗ニ付キ、住吉社ノ故事ヲ語ル、横川、桃源ノ話ニ感ジテ聯句五十韻ヲ詠ズ〔東〕

九月十四日、京ヨリ僧来ルアリテ、両軍ノ戦況ヲ告グ、相国寺マタ

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

香灯断チテ鐘魚暗シト〔東〕
九月十九日、展重陽ヲ賞シ、聯句アリ〔東〕
九月二十八、慈雲庵ニ春溪洪曹三周忌辰斎会ヲ営ム〔東〕
九月二十九日、景徐周麟、京ヨリ市村ニ到リ、慈雲院ニ入ル〔東〕
九月晦日、慈雲院ニ於テ夢窓忌ヲ営ム〔東〕
十月八日、士卒ノ京極陣ヨリ来リテ、相国寺炎上ノコトヲ告グ〔東〕
〔大日本史料〕応仁元・十・三条
十月十一日、小倉実澄ノ勧メニ応ジ、横川・景徐ト共ニ永源寺ニ遊ブ、錦藍亭、含空院ニ詣リ、曹源寺ニ一宿、夜、賦詩聯句アリ〔東〕
十月十二日、曹源寺ヲ辞シテ大歇亭下ニ到リ、瀑布ヲ観ル、帰路、永源寺長老ノ命ニ依リ一僧ノ一行ヲ留ムルアリ再ビ永源寺ニ到リ、一宿ス、夕刻、寂室遺偈・遺誡・光厳帝問法御書等ヲ覧ル〔東〕
十月十三日、永源寺斎ニ赴キ、各八句詩ヲ長老ニ呈ス、長老マタ寂室一偈ヲ誦シテ横川ノ手跡ヲ求ム、午後、永安寺ニ到リ、龍井庵壁ニ詩ヲ題ス、間道二里ヲ行キテ佐久良ノ実澄私第ニ到ル、菊後話梅ト題シテ詩ヲ賦シ、置酒ス〔東〕
十月十四日、近江戦陣ニ動キアリ、佐々木政堯ヨリ実澄ニ出陣ヲ促ス、実澄、部下ヲ軍ニ赴カシメテ、自ラハ詩筵ヲ続ク〔東〕
十月十五日、私第ヲ辞スルニ際シ、実澄、景徐ニ向来賦スル所ノ詩ヲ書シ、横川ニ跋ヲ付センコトヲ求ム〔東〕
十一月二日、市村慈雲庵カラ龍門庵ニ移居ス〔東〕
十二月五日、早朝横川ト共ニ佐久良ノ実澄私第ニ向フ、蒲生氏郷十三回忌辰アリ〔東〕

応仁二年（戊子）（三十九歳）

二月二十三日、景徐、近江草野ニ両親ヲ省ス、横川ト共ニ句シテ之ヲ餞ス〔東〕[11]
三月　日、益之宗箴、近江牛山ヨリ桃源ニ書信ヲ致シ、詩ヲ贈ル、
コノ頃、伯春侍者ノタメニ千字文序ヲ作ル〔諸賢雑文〕〔大谷本小補〕
四月八日、一初景統、尾張ヨリ商隊ニ随ツテ上洛ノ途次、山上ノ宿ヨリ龍門庵ヲ訪フ、横川、即チ之ニ随ツテ上洛シテ師兄龍渕本珠ヲ問ハントス〔東〕
四月九日　快晴、横川、一初ト共ニ出立ス〔東〕[12]
コノ夏、大干アリ、永源寺長老（玉翁禅玖カ）山中一衆ヲ率イテ瀑神ニ祈雨ス、桃源之ニ従フ、帰路、北溟ノ九瀬村円枕庵ニ到ル〔大谷本小補〕
八月二十四日、横川ト共ニ、蒲生郡日野景珠庵ニ柏舟ノ母ノ喪ヲ吊フ、翌二十五日ソノ二七日忌辰、横川、仏事法語ヲ製ス〔後集〕
十月二十四日、小倉実澄ノ子掌金上坐ノ初七日仏事アリ〔後集〕
閏十月八日、同三七日忌辰〔後集〕
閏十月二十二日、同五七日忌辰〔後集〕
十二月十八日、曹源寺龍門庵元龍ノタメニ逆修仏事法語ヲ製ス、横川マタ同秉炬法語ヲ製ス〔大谷本小補〕〔後集〕

文明元年（己丑）（四月二十八日改元）（四十歳）

二月六日、龍安寺僧某、草野ヨリ到リ、横川ニ景徐ノ書状ヲ将来ス〔後集〕
二月　日、北溟元渭ノタメニ円枕庵記ヲ製ス〔大谷本小補〕
三月　日、横川、北岩蔵ニ到リ、瑞溪ニ小補東遊後集ノ序ヲ請フ〔続集〕
五月　日、継宗禅派、伊勢ヨリ曹源寺石頭庵ニ到リ、龍門庵ニ来訪ス〔大谷本小補〕
七月二十六日、久室永公大姉十三年忌仏事法語ヲ製ス〔大谷本小補〕

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

七月晦日、横川再ビ北岩蔵ニ瑞溪ヲ訪ヒ、小補東遊後集序ヲ請フ〔後集〕

九月二十四日、横川、京ヨリ帰山ス、龍門庵ニ詩会アリ、題楓林残照、利渉守溱遨頭ヲ勤ム〔後集〕

十一月八日、梅岑庵ヲ造リ、コノ日移居ス〔大谷本小補〕

十二月二十五日、小倉実澄、永源寺側ニ識廬庵ヲ建ツ、尋デ横川之ニ居ス〔後集〕〔大日本史料〕文明元・十二・二十五条

文明二年（庚寅）（四十一歳）

正月　日、梅岑庵ニ正月詩会ヲ催ス、利渉在座ス〔続集〕

二月　日、奇英蔵主、梅岑庵ヲ訪フ〔大谷本小補〕

三月十八日、横川、草野ニ赴キ、醍醐教寺ニアリ、マタコノ頃、飯山律寺ニ於テ景徐ト再会ス、マタコノ頃、大原正伝庵ニ万里ト再会ス〔続集〕

四月八日、横川既ニ帰山シ、永源寺舜明侍者ノタメニ大弁才天開眼供養語ヲ製ス、コノ頃、梅岑庵僧実翁従貞上坐五七日率堵仏事アリ、横川法語ヲ製ス〔続集〕

六月八日、梅岑庵ニ詩会ヲ催ス〔続集〕

七月二十三日、横川、識廬庵記ヲ製ス〔続集〕〔古文書時代鑑〕続篇

八月四日、京極持清卒ス、行年六十四、戒号宝生寺殿月林生観、コノ後小倉実澄出家ス、法名文紀正綱〔大日本史料〕文明二年八月四日条〔続集〕

十一月三日、冬至偈ヲ製ス〔続集〕

十二月六日、小倉実澄、先考宗山湜公ノ十三回忌辰ヲ預修ス〔続集〕

文明三年（辛卯）（四十二歳）

正月十五日、小倉実澄、識廬庵ニ於テ、故主京極持清ノ弔祭ヲ営ム、横川、拈香法語ヲ製ス〔続集〕

夏、建仁寺桂林徳昌、曹源寺石頭庵ニ来住ス[13]、横川、ソノ門人光湜侍者ノタメニ持正字説ヲ製ス〔続集〕

十一月二日、冬至偈ヲ製ス、翌三日、横川之ヲ次韻ス〔続集〕

文明四年（壬辰）（四十三歳）

正月十九日、蒲生秀貞三十三回忌辰斎アリ、実澄、法華経書写ヲ僧ニ命ジ、自ラ一巻ヲ写ス、横川、ソノ銘ト序ヲ書ス〔続集〕

二月、小倉実澄、伊勢神宮ニ参詣ス〔続集〕

三月頃、季弘大叔ニ書ヲ送ル、横川マタソノ書尾ニ係ケテ書信ヲ致ス〔続集〕

四月、横川、瑞雲山永安寺ノ修造疏并序ヲ製ス〔続集〕

コノ月、横川、北岩蔵ニ瑞溪ヲ訪ヒ[14]、小補東遊続集ノ跋ヲ求ム、コノ時上洛シテ、以後京中ニ移居スルカ〔続集〕〔前集〕

文明五年（癸巳）（四十四歳）

春、南栄陽侍者ノ仏事偈ノ韻ヲ次ス〔大谷本小補〕

五月八日、瑞溪周鳳示寂ス、行年八十三歳、コノ以前ニ識廬庵画軸ニ賛詩ス〔大日本史料〕文明五年五月八日条〔大日本古記録〕臥雲日件録抜尤解題〔五山文学新集〕第五巻解題

七月　日、横川、識廬庵画軸ニ著賛ス〔前集〕

十二月　日、是ヨリ先、実澄、詩ヲ横川ニ寄セテ招ク、横川之ヲ謝シテ五山僧ニ和ヲ請フ、コノ月、天隠之ニ詩序ヲ寄ス〔識廬庵詩軸〕〔前集〕

文明六年（甲午）（四十五歳）

二月　日、横川、識廬庵詩軸ニ詩并序ヲ寄ス[15]〔識廬庵詩軸〕〔前集〕

八月五日、前夜壬生雅久来訪、一宿ス、聯句七十韻成ル、早晨、邵康節易鑑明断ヲ抄ス、是ヨリ先、宋胡方平ノ易学啓蒙通釈ヲ抄シ、コノ日マデニ同巻上本図書第一ヨリ原卦畫第二ニ至ル、本院祖師忌

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

アリ〔百〕三[16]

八月十六日、周易講筵ヲ開ク〔百〕十二[17]

九月一日、易学啓蒙通釈巻上（原卦畫第二マデ）ヲ抄シ了ル〔百〕三

十月十六日、易学啓蒙通釈巻下明蓍策第三（閏月算法マデ）ヲ抄ス、[18]

時ニ西軍ノ勢近邑ニ到ル〔百〕四・五

十月二十四日、易学啓蒙通釈巻下明蓍策第三ヲ抄シ了ル〔百〕五[19]

コノ後、同巻下考変占第四ヲ抄ス〔百〕六・七

文明七年（乙未）（四十六歳）

三月二十四日周易上経乾伝第一ヲ抄ス、コノ頃衰疾募リ、マタ夏子モ庵ヲ辞シテ、烹粥ニ便ナラズ〔百〕十一[20]

八月二十四日、周易上経坤伝第二ヲ抄ス、マタ小倉実澄ノタメニ祈念ス〔百〕十二[21]

九月一日、周易上経屯伝第三ヲ抄ス、コノ日日食アリ〔百〕十二[22]

九月四日、周易上経蒙伝第四ヲ抄ス〔百〕十二

九月七日、周易上経需伝第五ヲ抄ス、藺圭之ノ為ニ坡詩ヲ講ズ、菊上人、ソノ俗弟ノ為ニ忌斎ヲ営ム、是ヨリ先、東軍京極政経、延暦寺僧徒ト共ニ、西軍六角高頼ヲ攻メントス、僧徒出雲ニ在リシ多賀高忠ノ帰来ヲ待チテ因循ス、時ニ美濃土岐軍高頼ヲ援ケテ勢振フ、コノ日卯初刻ヨリ両軍合戦アリ、西軍大潰ス〔百〕十三〔大日本史料〕第八編之八

九月九日、重陽詩会ヲ催シ、詩ヲ永源寺・含空院・退蔵寺ノ三長老ニ寄ス、入浴ノ後宴アリ、宴後詩ヲ評ス、ソノ後周易上経訟伝第六ヲ抄ス〔百〕十三

九月十二日、周易上経師伝第七ヲ抄ス、七日以来ノ近江ノ戦況ノ卦象ト合致セルヲ慶ブ〔百〕十三[23]

九月十四日、周易上経比伝第八ヲ抄ス、コノ日珀上人小倉実澄ノ使トシテ来訪、識廬庵ニ実澄ノ資福ヲ祈ル〔百〕十三[24]

九月十八日、周易上経小蓄伝第九ヲ抄ス、小倉実澄ヨリ伝語アリ〔百〕十三[25]

九月　日、周易上経履伝第十ヲ抄ス〔百〕[26]

九月二十〔一カ〕日、実澄ノ招キニ応ジソノ軍幕ニ赴キ、二十二日帰庵ス〔百〕十四[27]

九月二十三日、周易上経泰伝第十一ヲ抄ス、藺圭之餅ヲ、猷公紅柿ヲ恵ス〔百〕十四

九月二十四日、胡桃樹ヲ誤ツテ剪ラル、瞽者新一来宿、平家琵琶ヲ聴ク、周易上経否伝第十二ヲ抄ス〔百〕十四[28]

九月二十七日、永源寺丈室ニ招カレテ松茸ヲ喫ス、含空院主同座、過午帰庵、周易上経同人伝第十三ヲ抄ス〔百〕十四[29]

九月二十八日、周易上経大有伝第十四ヲ抄ス、夕刻ヨリ暴風トナル〔百〕十四

九月晦日、夢窓疎石諱辰、識廬庵ニ数僧ヲ請シテ斎ヲ営ム、夜半ニ至リ周易上経謙伝第十五ヲ抄ス〔百〕十四

十月三日、早晨、永源寺月忌斎会ニ赴キ、次デ離樹庵ニ至リ大虚ノタメニ悼偈ヲ作ル、永源長老大亨訪ネ来リ、夕刻マデ閑談、唐紙一片ヲ恵ス、十月一日ヨリ始メシ周易上経豫伝第十六ヲ抄シ了ル〔百〕十四

十月五日、達磨忌斎、同舎諸郎偈頌ヲ作ル、小倉実澄伝語アリ、周易上経随伝第十七ヲ抄ス〔百〕十五

十月六日、大雪、暮ニ延東綿帰来ス、周易上経蠱伝第十八ヲ抄ス〔百〕十五

十月八日、夜坐禅、罷リテ後、雑炊ヲ作リ、衆僧ト食ス、寒気甚シ、周易上経臨伝第十九ヲ抄ス〔百〕十五[30]

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

十月十日、周易上経観伝第二十ヲ抄ス〔百〕十五
十月十二日、午後集雲山志高長老ヨリ紅柿ヲ恵セラル、和歌一首ヲ添ヘタリ、コレニ因ンデ夢窓国師ノ和歌ニ優レ、マタ亡父年登居士ノ和歌ニ長ゼシコトヲ想起ス、周易上経噬嗑伝第二十一ヲ抄ス(31)〔百〕十五
十月十四日、入浴、永源寺丈室ニ至リ、主翁ト曹洞宗風ノコトヲ談ズ、周易上経賁伝第二十二ヲ抄ス〔百〕十五
十月十六日、二十四気ノ内小雪、周易上経剝伝第二十三ヲ抄ス(32)〔百〕十五
十月十九日、浴後、周易上経復伝第二十四ヲ抄ス〔百〕十六
マタ、コノ夜、周易上経無妄伝第二十五ヲ抄ス、夜分、門人延東綿ノ買求メ来タル豆腐デ田楽ヲ作リ、百済寺酒ヲ暖メテ、隣庵ノ僧等ト共ニ楽シム(34)〔百〕十六
十月二十日、玉汝佐詩会ヲ催ス、ソノ後同ジク無妄伝ヲ抄シテ二十一日初更ニ至ル、瞽者慮一平家ヲ語ル〔百〕十六
十月二十三日、風雪強シ、周易上経大蓄伝第二十六ヲ抄ス〔百〕十六
十月二十四日、周易上経頤伝第二十七ヲ抄ス〔百〕十六
十月二十五日、詩例会ヲ催ス、題賛永壺先生〔百〕十六
十月二十六日、子舟育上人小田刈ヨリ至リ、庵ヲ捨テ旅ニ出ントスルヲ云ヘリ、之ヲ慰留シ同病相憐ム、周易上経大過伝第二十八ヲ抄ス(35)〔百〕十六
十月二十八日、性惠童女小祥忌、ソノ母日頃僧ニ施シ、法華経ヲ写シ、金穀ヲ納メ、庵ニ寄セテ水飯ヲ供シテ亡子ノ菩提ヲ弔ハントス、ソノ様『荘子』ノ負鼓ニ似タリ、依リテ桃源ソノ母ノタメニ僧ニ命ジテ鼓ヲ作ラシム、コノ忌斎ノ日ニ至リテ鼓出来セズ、桃源怒リテ斎ヲ止ム、胸次欝陶シテ私カニ自省スルコトアリ、周易上経坎伝第二十九ヲ抄ス〔百〕十六
十月二十九日、東軍不利ノ伝言ニ飛語紛々セリ、近江山上、高野ノ諸将西軍ニ属ストモアリ、周易上経離伝第三十ヲ抄ス(36)〔百〕十六
十月晦日、夜空ニ光物アリ、同伝ヲ抄シ、周易上経抄シ了ル〔百〕十六
十一月十一日、周易下経咸伝第三十一ヲ抄シ始ム〔百〕十七
十一月六日、同伝ヲ抄シ了ル、マタ心翁浄泉禅門率堵法語ヲ製ス(37)〔百〕十七〔大谷本小補〕
十一月八日、季玉承球郷里遠江ヨリ帰来ス、周易下経恒伝第三十二ヲ抄ス〔百〕十七
十一月十日、永源寺長老来話、麒麟竭、獅子筋ノコトニ及ブ、周易下経遯伝第三十三ヲ抄ス〔百〕十七
十一月十一日、周易下経大壮伝第三十四ヲ抄ス〔百〕十七
十一月十三日、周易下経晋伝第三十五ヲ抄ス〔百〕十七
十一月　日、周易下経明夷伝第三十六ヲ抄ス〔百〕十七
十一月十七日、周易下経家人伝第三十七ヲ抄ス〔百〕十七
十一月十八日、周易下経睽伝第三十八ヲ抄ス、コノ抄、多事ヲ以テ二十六日ニ至ル〔百〕十七
十一月二十七日、周易下経蹇伝第三十九ヲ抄シ始ム〔百〕十八
十一月二十九日、及童逝ク(38)〔百〕十八
十二月六日、及童初七日忌辰ヲ営ム〔百〕十八
十二月二十日、去月末予定ノ詩会、コノ日開筵ス、マタ周易下経蹇伝第三十九ヲ抄シ了ル(39)〔百〕十八
十二月二十六日、及童子五七日忌斎アリ、及童ノ養父某物ヲ贈リ卒堵婆経木一束ヲ副ヘテ福田利益ノタメニ法華経ヲ書センコトヲ請フ、桃源諸僧ノ助力ヲ得テ不日功ヲ了フ、周易下経解伝第四十ヲ抄

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

ス〔百〕十八

十二月二十九日、周易下経損伝第四十一ヲ抄ス〔百〕十八　（未了）

〔注〕

（1）『百衲襖』八に「周易命期運数之事、誕生永享二年庚戌六月十七日」「右庚戌者、廼亦庵之生年也」とある。

市村氏について『近江愛知郡志』が一章を設けるが、系図その他が明らかでない。市村の名は愛知川市の市庭から出た愛知川町大字市村の豪族で、市庭の奉行をした家らしい。市村氏の名が出る最古の史料は、貞治元年の市村六郎左衛門尉宛佐々木氏頼の野洲郡吉地庄の所務委任状である（出雲松江市蒲生鰕市氏所蔵文書）。次に嘉吉二年の市村備後守数信の皇室御領蒲生郡羽田庄代官職請文があり（宝鏡寺文書）、長禄二年、石清水八幡宮大山崎神人の申状によって、近江油商人の非分糺明を命じた幕府奉行人連署奉書（山城国離宮八幡神社文書）の宛名に市村備後守の名が出る。また（年欠）五月十七日付の京極高清書状（多賀豊後守宛）に、高清（当時入道宗意）が観世大夫能を催した時、豊後守が病欠した旨を市村備後守が伝えたことがみえる（東浅井郡金光寺文書）。桃源の父年登居士は寛正五年四月二日の没である。右の備後守数信がその人であるかも知れない。この頃から中世末にかけて、市村氏は数流に分れている。長享元年、足利義凞の六角征伐時の金剛輪寺文書に「市村四郎兵衛」の名があり、明応二年四月の豊満神社祭礼を「市村中殿屋敷」に於て勤めたことが出る（豊満神社文書）。この時は八郎右衛門が牢人のため四郎兵衛が勤仕したという。下って天文五月閏十月の「金剛輪寺下倉下用帳」に「百拾六文市村備後守殿へ為音信樽一之代」とあり、（年月欠）二十五日記事にも「市村四郎兵衛」の名が出る。天文二十年、豊満神社寄進状の連名中に「市村右衛門尉良忠」の名がある。これらによれば、おそらく備後守を宗家として市村氏に数流があったことになる。また市村には城址があって、ここから北方大字磯部に通じる道を、備後街道と称するという。これらはすべて『郡志』がのべるところである。

（2）『百衲襖』二十二に「蓋余二歳而失母矣」とある。その後は岩桂慈昌尼に養育されたらしいことが、後に景徐が作った預修秉炬仏事法語にみえる（八一二九）。

岩桂慈昌優婆夷、如梅無恙、似菊有芳、通家田里野市村、懐朱陳嫁娶之始、擇婿江州南郡北郡、擅和漢詠歌之場、落鬟作尼一女子、結髪奉主両侍郎、恩越萱親、育桃源致之長老職、志袒叢社、拜竹所列于弟子行、

（3）出家については『百衲襖』十九に「余之所祈于神者、唯以母之遺志、欲遂出家本志焉、若其志遂、則道也両不在人之後」、『同』二十二に「自非後母之生二男、則殆乎妨余之志焉、使余帰釈氏至今日者、後母之恩也、所生之遺言、其四皓安劉、是滅劉之謂也哉」とある。『相国寺前住籍』他に法齢五十七とあるのによれば、この年の出家である。

斉岳禅師については、『百衲襖』十九に「余幼年従斉岳及先年〔考脱カ〕登居士而詣者数矣」「従立此願以降二十年之間、毎歳必詣、其祈如初」と参宮のことがみえ、横川景三『補庵京華新集』斉岳拈香法語に「斉岳均公首座、夙乗地上本願力、誓成女中丈夫児、承藤原而無俗情、聞霊山阿姨白仏出家之事、養桃源猶如吾子」とする。文明十九年正月七日が三十三年忌に当るから、康正元年に示寂した。桃源二十六歳の時である。

年登居士について桃源の叙述がある。

廿四日之夜（文明八年正月）、夢先考年登居士、告余曰、近将為其主君有請於公、而身若有疾病事故、則恐事之遅滞、故先使松井非常軒診脈、以服良薬、自医其身而医其国矣、嗚乎、居士生而事其君、則忘身忘家、忠肝義膽、碑于人口、今也極氏之家不絶如縷矣、居士雖幽明之隔、猶不忍見之、而郷者所志之身、猶為其君則医之（〔百〕十八）

忠肝義胆の人であったという亡父を桃源が夢みるのは、近江の戦況が急であったばかりでなく、その遺子、桃源にとって亡父の志を嗣ぐべき異母弟二人の去就と深い関わりがあった。右の文に続いて、

有二子、其季早党於賊、不言足耳、其仲、乃自丁亥（応仁元）乱至乙未（文明七）、雨沐風櫛、不為無功労、去歳官軍之敗不守其節、而又帰于賊、其罪甚於季也、父子之間、其何楚越如此哉

とある。当初から西軍に属した季子はともかく、仲子までが文明七年、戦況の悪化に堪えられず西軍に属した、そのことが、桃源を苦しめたらし

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

い。

別に、『百衲襖』二十二に「臘月初五日、禅余天寒稍、焦糊餅防寒、無老無少各唯一枚焉耳、此餅昨日余之萱堂之所賜也、萱堂即後母也、非所生也、不面者良久、於義不可也、然余有義、与孟八弟不可通者、八弟与萱堂同居、故不能升其堂、遺憾不浅矣、不敢以非所生而疎之」（八―二九―一一〇）と継母と弟のことがみえる。

桃源が乱を避けて近江に下り永源寺山中にあった時のことで、継母に会いに行けない事情をのべたものである。桃源が「孟八弟」と呼ぶ弟は二人の中の何れか。上村観光は「孟八」を弟の名とみたようであるが（『史記抄の著者桃源瑞仙』）、無著道忠の編む『葛藤語箋』によれば、「孟八郎」とあり、「まんぱろう」と訓むようである。同書に「方語集不レ由三道理一作レ事曰三孟八郎一」「孟八郎始似レ是後非者」と例を引くのによってみれば、正しく仲子を指すのに他ならない。継母はこの上の弟と同居していたのである。他の部分で明らかな如く桃源は名教論の立場にたったから、孟八郎を道義的に容し得ず、その弟と同居する母を訪れることが出来なかった、のである。このあたり、文章の語調をふくめて、儒教的信念が出世間者としての仏道者の面影を覆っている感がするが、それも忠節の人であったらしい年登居士市村氏の武将の血筋を桃源が享けたということとも読める。後年、亀泉集証が「太情強」と評した情の強さが、彼が義という文字で説明し切ろうとしている哀しさを一層深めたことも考えられる。再び上洛するまでの十数年間郷里にありながら家を訪れた様子がない。彼は「遺憾不浅矣」とのべた。東軍の小倉実澄の庇護下にあった桃源の立場は、弟達の西軍入りによって微妙なものとなった筈である。実澄の度量を語ると共に、桃源の山中生活が「出世間」の意味を鋭く荷ったことを語っている。応仁元年永源寺に向う途次、兵主安楽寺で月翁周鏡に逢い二百韻の聯句を詠んだ時に「勤公桃源弟」と参会したが、この人が仲弟かと思われる。文明七年西軍に属する以前のことである。

異母妹は、後年出家して市村慈眼庵の開基となった。後に景徐がその預修秉炬仏事法語を作っている（八―二九―一一二）。

江州市村慈眼庵頭松蔭慈鶴尼首座、幼拜天英禅師為師、命之曰慈鶴、族兄桃源師、字之曰松蔭、今令予説厥義、且求秉炬法語、辞弗獲一状領過、共惟、松蔭鶴公首座、棄恩割愛、剃髪披緇、江左風華親出望族、天下英物早承名師、（中略）六十七歳、不生不滅、三十二身、大慈大悲

桃源瑞仙頂像（相国寺慈照院所蔵）

製文の年は不明であるが慈鶴尼六十七歳の年の預修である。兄が字を、師天英が諱を、その説を景徐がなしたこと、市村に慈眼庵を構えて居したことを知る。

慈鶴尼の諱号を命して、その師であった天英は、諱周賢、相国寺慈照院玉林軒の人で在中中淹の法嗣。長禄四年相国寺に住し、寛正四年二月晦日、六十二歳で示寂した。景徐の師叔にあたり、桃源と兼ねて親交があった。景徐が

予自童年知東山有翺之老人、老人与予師叔天英善遇、継与桃源翁情交甚深、時時恵来、以故屢侍其側聴其余論（〔翰〕書西游集後）

とするのによれば、翺之恵鳳を共通の友人とする仲であった。応仁二年尾張から隊商に随って上洛する途次、永源寺に桃源を見舞った一初景統は天英の法嗣であった。

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

（4）瑞溪の『臥雲稿』に「次韻仙童（瑞仙）試毫寄令師明遠和尚」と題して、

湖水東辺古梵宮、慚吾未趁一帆風、劉郎去後春多事、道士桃花千樹紅

の詩がある（新集五、五一頁）。万里の『梅花無尽蔵』四「大平雀」題下自注に「余始入社、横川・桃源為同年」とあり、同三下に「春雨庵桃源和尚、与某梅子、同入万年之社」とある。横川の「前住相国桃源和尚大禅師真賛」に「初公在官寺掛塔、両人皆少年児童」とあり（『補庵京華外集』）、また『梅花無尽蔵』一「灯下話旧」に「憶昔看君十二三」とあるのによれば、横川・万里が同時に相国寺に掛塔したのは、十二三歳の頃であったことを知る。

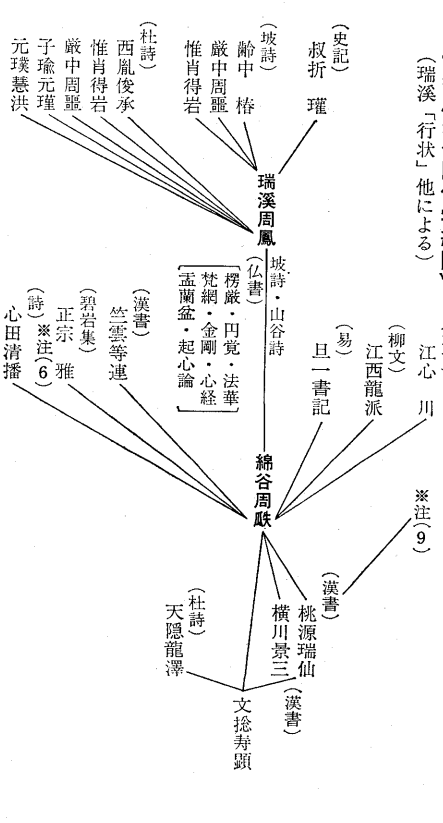
明遠俊哲は、伊予の人、相国寺に絶海中津・空谷明応に師事した。永享八年、近江金剛寺（諸山）に住し、同十二年、山城等持寺（十刹）に住持した。嘉吉三年七月、相国寺（五十七世）の公帖を受けたが入院しなかった。勝定院に寓して、詩文にすぐれたという。康正元年五月七日示寂（七十歳）。桃源との関係ではとくに注目すべき史料は見当らないが、相国寺友社の中心であったこの人に近侍して、詩文の指導をうける環境に恵まれたのであろう事を、先の瑞溪の試筆次韻が暗示する。

（5）『百衲襖』十三に「而至妙智（竺雲等連）・北禅（瑞溪周鳳）二大老、不敢措一辞者、二老之在天下、猶三光五岳之於天地之間、誰不仰瞻哉、況余三十年升其堂、入其室親受講磨、則隻字片言皆無非其膏腴焉」とある。文明七年九月の筆であるから、文安二年頃、桃源十六歳頃にあたる。『百衲襖』九に、四六文の学統を叙して、「予出入北禅翁門余二十年、親受其鉗鎚、則不可謂無講明焉、所謂山門・諸山・道旧・江湖・同門等疏僅撰数篇、皆得北禅是正」とするから、瑞溪に親しく四六文の指導を受けたのである。二十年とするのは長禄元年にあたるが、桃源の修学期における恩師である。『史記抄』太史公自序に、史記研究について、「余之言、自彊（竺雲）・北禅（雲章一慶）・玉渚三大老及一条台閣、清家環翠翁之言也」とあって、二人のほかに雲章、兼良、業忠にも学んでいるのは注目される。

瑞溪に対する桃源の敬意は少なからず文章に表現されているが『史記抄』孝武本紀の、瑞溪事歴の記述はその一例である。そのことは友人の認める所で、横川が桃源没後の肖像賛に「北禅門下愛容、有始有終、夫是之謂巍々堂々竹所禅匠、塵々刹々梅岑主翁者也」と述べて、桃源が瑞溪の真弟子であることを示した。詩文集序跋を遠隔の地まで赴いて瑞溪に求めた横川が一歩譲って記したものである。

史料の語るところ、瑞溪が学の大成を期待したのは綿谷周瓰である。綿谷は別号松鶴、瑞溪の師兄大梁の室に入ったが、師の死後も終生瑞溪に従って近侍し、晩年まで侍者位に止まった。諸山の公帖を受けたのは五十四歳の時である。応仁の乱を瑞溪と共に北岩蔵に避けたが、文明四年急死した。瑞溪より十五歳年少の六十七歳である。瑞溪は綿谷の行状を作って、世に所謂高僧の行状に劣らぬ詳細な記述によって、事歴と学業を顕らかにした（大日本史料、文明四年二月二十二日条）。その叙述は室町期学僧の諸学学習の貴重な史料であるが、紙幅の都合上紹介を省略せざるを得ない。綿谷については別の機会を期し、学統関係図（第一表）を掲げた。同時代の材料として、桃源の就学を伺う参考となるものである。文明四年に桃源は四十四歳である。瑞溪から数々の秘本を譲られて学業に励む綿谷の姿に、桃源が注目しなかった筈はない〔注（9）参照〕。

第一表〔綿谷関係学統図〕
（瑞溪「行状」他による）



©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

（6）

『史記抄』日者列伝に次の記事がみえる。

心華院栂室大和尚廻（周馥）山名氏之華冑也、幼養于細川氏故讃州太守之家、（中略）凡無書不学矣、無学不精矣、尤長於易学、同門維甸老以易名于世、学者宗之、及其死也、其書挙而付心華、蓋皆家学矣、賢首慈恩之教能究其奥焉、至宗門語録、以為己任、最与先天英翁交歓、而毎往還、倶忘其帰、英郷者已以余嘗陪雅蔵主講筵、書所聴者之草藁、借与之心華、々親手写之、一日来話、還其所借者、余侍在其側、二老笑告其事、余愕尓驚曰、少作不足取、況即席所書必有読不得矣、華曰、甚苦其難読、恰如退之於儀礼、東坡之於楞伽、余曰、何不看浄書、華曰、想子宝借故不敢言、余曰、経和尚一覧者、豈非華衮之栄哉、華曰、幸甚、即袖三両巻而自後相続遂尽、其人天眼目、碧岩録両部皆畢功、可謂不耻下問者、于草藁于浄書、凡親写二遍、一日謝余曰、子之厚也何以報、余素聞、有史記秘本曰、若被見借何賜如焉、曰諾

記事は栂室周馥の史記秘本に係る逸話で天英は背後にみえるかたちとなっているが、天英が桃源青年期の聴書草藁を入手してこれを栂室に貸与したことに端を発する。これだけではこの草藁が何時のものかは全く判らないが、幸いに関連史料がある。

桃源が人天眼目と碧岩録を聴講した雅蔵主とは、建仁寺清隠庵の正宗□雅のことで、天祐梵瑕とも交渉があったことが瑞溪周鳳の『臥雲日件録』にみえる。

又赴玄珠十三年忌請、到壺隠、東山清隠庵雅蔵主、号正宗、今日亦赴請来、又長松庵瑕首座（天祐梵瑕）亦復来会、同就壺隠閑話、予問正宗、昨在鎌倉、見何人耶、曰、時珍蔵海（性珍）、〻東輝（僧海一暉）二老旺化、又惟肖（得岩）偶自京来寓之日也、……正宗京居二十年、単丁住庵、儒釈書、苟有発起者、則講之、凡以之為勤、可尚也、今為瑕首座、講碧岩集者已八巻、瑕首座、（綿谷周瑕）曇侍者、寓于長楽妙善庵、列于講筵、故今日有此請也、瑕首座亦有益于后学、庵与妙善相隣云々（享徳二・十・九条）

これによれば雅蔵主はかつて鎌倉にあって蔵海性珍、東暉僧海に参じた人で今は京に住んで二十年、独り住庵して求める者があれば応じて儒釈書を講じたのである。康正元・十・三条に「今朝与清隠話次、問其生縁、則奥州也、因説奥州広大曰、東西二十日、尚未行尽、而南北則八日也、自京赴奥州、凡二十日而入其境也、予又問、建長・円覚、相去多少、曰、八町也、又問其嗣承、則曰、乾峯弟子長曇、号瑞岩、纔諸山而終矣、其嗣住建長――某乃其嗣也、又説相州泊船庵之境致曰、有拈花嶺・指月峯」とあるのによれば生国陸奥の人で、乾峯士曇の法孫、建長寺華宗心栄の法嗣であるという。また寛正元・壬九・十六条に天英周賢が「法花毎字四声」の説について質問したのに対して解答する処によって、さきの苟しくも発起する者あれば儒釈書を講ずるを勤めと為す、の一例をみることができる。享徳二年十月には、既に天祐のために碧岩集を講じて八巻に及び、綿谷と曇侍者が列席したと日件録にあった。後述する雲章の清規講でのかかわりからいって、『史記抄』にいう天英が草稿を持っていた桃源の碧岩集抄とは、この時の講義に桃源も列なって作られたものと考えられるのである。もうひとつの人天眼目抄については、『百衲襖』十八に「勝智主翁月翁（周鏡）有書、見借余之所記人天眼目倭抄」（八一一九）とあって、月翁周鏡に貸与している。同書にはこれに続いて「先是菩提季弘（大叔）以書借清規抄」とあり、後述する雲桃鈔を指すと思われる。この碧岩集抄をもとにしてであろう、後年永源寺山中に退居した時、易抄執筆の合間に門人に碧岩録を講じた。『百衲襖』に、

（文明七年）乙未中秋後一日、……斎罷、仍藺圭之携坡詩来、為講者三紙、其席未散、菊上人（旭英玄菊）袖碧岩習句読、大抵率以為常（〔百〕十二）

（文明九年正月）月下澣又講史記、至閏講坡詩、梅甫而黄集、玉汝而碧岩、教授之無暇（〔百〕三十四）

とみえる。なお、弘治・文禄頃の雪岑津興の詩文集『頌詩』に桃源の人天眼目抄の逸文がみえる。

人天眼目桃源抄云、達磨初入魏時、洛中諸士夫、皆持儒典往詢問之、磨曰、不識字、但能鼻鼾通、諸士以命吾〇令嗅了云、説是非底文字、次以春秋令嗅、磨曰、血腥、次以周易令嗅、乃曰、此天書、吾西国無之、吾西国雖無之能以一音一字諷之、其一音即

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

如来出音（東福寺霊雲院蔵本・二丁ウ）

また先の『史記抄』中に栴室の「尤長於易学」とすることについて『蔭』（長享二・十二・十六条）に、大亨妙亨―玉潭中瑳―栴室と、天龍寺華厳院に易を家伝としたことがみえている。ここにも後継者を喪なって中絶するが、叢林の儒学を支持する橋堡のひとつがあったことになる。

（7）『百衲襖』（八、占推先賢）に「余二十年前有意学易、故売書郎嚢底、凡有易之書抄、則無不収取焉」とある。この抄は文明七年に作られたから康正元年頃のことをのべたものである。この記事の後にその頃入手したと思われる牧首座の抄五冊の名がみえる。易上経乾伝第一巻・正義序説并八論一策、大易断例并諸図一策、本朝平善甫中正之所撰觴崇算法一策、命期訣がそれである。牧首座について、牧中梵祐とする説（大塚光信「史記抄について」）、牧中天岩とする説（芳賀前掲書）があるが、玉村竹二『五山禅僧伝記集成』によれば義堂門下の天岩□牧の誤りである。桃源がこの人と没交渉であったことは、右引用部分に「牧首座何人哉、悪筆甚於余、不足上人眼」とすることで明らか。牧首座に応永二十一年命期訣を伝授した前南禅寺聖徒明麟を「聖徒所伝妙處不為少矣」とその功を彰する。

他に「三善行康之以大儒定安真本所抄写命期秘抄」「柏舟翁命期経」を参照し、これらの短を去り長を取って百衲襖に採り入れたといっている。

柏舟宗趙は、明応四年、八十歳で示寂したから応永二十三年生れである。永享十二年足利学校で庠主快元に学び、三十一歳（文安三年）、武蔵箕田で希禅に易を学んだ。寛正四年美濃荘福寺に住して近江に戻り、文明元年八月、曹源寺に住し、同十一年八月、曹源寺含空院住持となる。この間文明九年十月から十一月にかけて、横川と景徐に周易抄を伝授した。桃源の周易講義の直後である。

慶応義塾大学付属図書館蔵『周易抄』三冊（110X/64/3）の内第三冊の末尾に左の識語がある。

文明丁酉十月廿一日始之、十一月十七日終之、自始到終与景徐麟蔵主講罷、校讎夜以継日、余過半聴堂閣筆者多、到節角處、令景徐速誦数過、或添或削、蓋余所筆乃景徐所筆也、而義理之異、烏焉之同、后之見者、正其誤也、

予昔於武州箕田縣就希禅々師学易、時三十一歳也、今以余所学易并三ケ秘訣、尽以奉傳於小補翁与景徐老無餘蘊矣、蓋余易（ママ）小補易也、第恐所聞、寡陋不適（ママ）小補之意也、

文明丁酉十一月廿七日、柏舟叟宗趙在判

両書の成立関係は不明である。桃源の抄完了を記念して横川と景徐が柏舟に伝授を求めたとも考えられる。この奥書で問題なのは、後述するごとく、文明九年には、横川も景徐も永源寺山上を下りて京に在ったことである。この講義は曹源寺に於てなされたのであろうか。彼等の詩文集にこの易学講受の様子が出ない。桃源も既に周易抄を了えて、史記抄の講述に入っているが、その識語類にこの年次には横川・景徐の来訪等について記すところがないのである。比較的短期間の集中講義で、関連記事の欠落には桃源の微妙な心理が反映しているのかも知れない。桃源は柏舟の所説を『百衲襖』の参考としたことについてふれている。

旧解乃与派（柏舟宗趙）・葭玉之二老、曽在足利学易之日、至於閏等、雖有師説甚不曉了、二老相俱挍讎撰之、与派者今講主柏舟師也、余写之入百衲襖抄中、或加注脚、有文字抵捂之処、則不免増損之、乙者滅者亦若干字而已、文明甲午（六年）小春十又六日

とあり、「今講主柏舟師也」とするのは、文明六年十月、山中で柏舟の講義があったことを示すが、柏舟は山上で何度か講じたのかも知れない。柏舟の周易抄に関する著、鈴木博『周易抄の国語学的研究』にもみえない。柏舟が桃源の抄について触れるのは、たった一ケ処だけであるという。足利学校と関連して、柏舟の易講について今後の研究が待たれる。

宗瑞については『百衲襖』二十三にみえる。「余未学易以前、為宗端兄講一遍」として、『大恵書』の答劉宝学に言及している。兄と称することから、法姪の祥岳宗瑞かと考えられる。師明遠の法弟玉渕崑の弟子である。法弟に旭岑瑞杲がおり、旭岑は桃源に詩文の序を求めたことがあり、桃源の死後、景徐が代って序を製した（〔翰〕四、旭岑詩并四六序）。

（8）大谷大学本『小補東遊集』に収める興源派嘉隠道贇門人維南詢の試筆詩

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

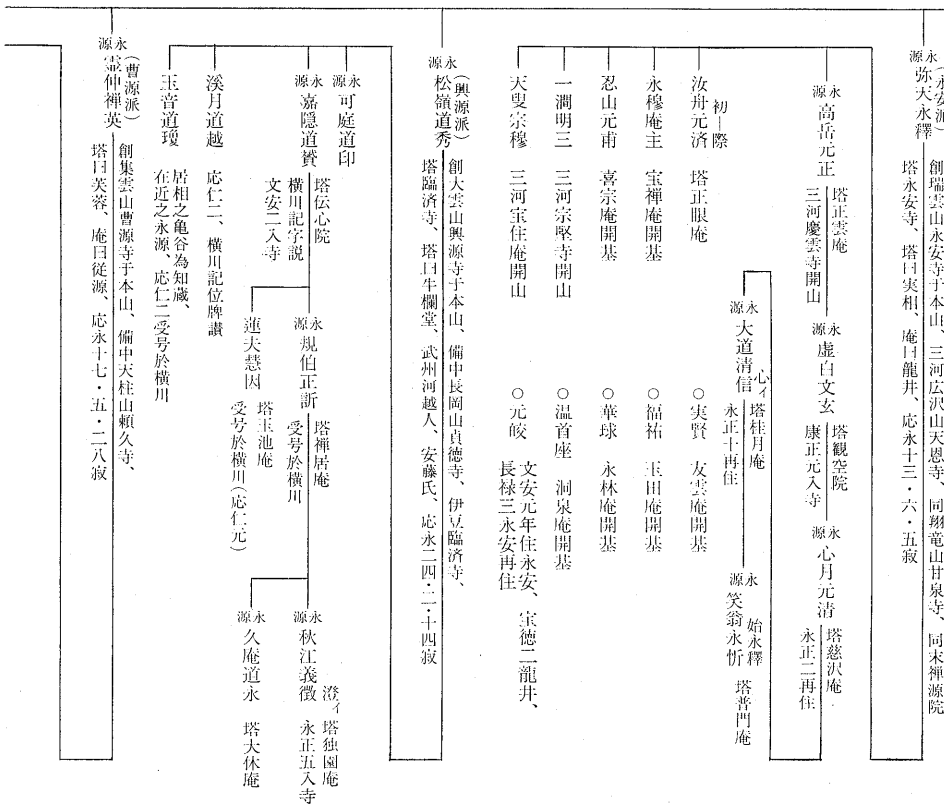
第二表

〔永源寺歴代住持〕（『山上宗譜図』他による）

永　享　5（1433）	12代　密山聖厳入寺（⟶文安２　退院）　退蔵下，直心庵開山
文　安　2（1445）（元イ）	13代　嘉隠道贇入寺（⟶康正元　退院）　興源下，伝心院開山
宝　徳　3	傑岩禅偉晋山，曹源下，大義院開山
康　正　元（1455）	14代　虚白文玄入寺（⟶文明４　退院）　永安下，観空院開山
長　禄　2	天容紹普晋山
寛　正　2	竺翁子舟晋山
寛　正　6	桂林徳昌晋山，曹源下，石頭庵開山
文　正　元	月江元皎晋山
応　仁　2	玉翁禅珍（玖イ）晋山，　曹源下，大龍院開山（延徳３．６　贈号前住）
文　明　3	子真禅史　晋山
文　明　4（1472）	15代　傑岩禅偉再住，（⟶文明15退院）
文　明　8	功林宗勲晋山
文　明　9	寛天元宥晋山（応仁比住曹源）
文　明　11（10イ）	大章元継晋山
文　明　11	規伯正訴晋山，興源下，禅居院開山
文　明　12	心月元清晋山，永安下，慈澤庵開山
文　明　15（1483）	16代　柏舟宗趙入寺（⟶明応 4.11.12 寂）　曹源下，無底庵開山
文　明　17	祖山慧範晋山
長　享　元	絶叟明心晋山
延　徳　2	大道清心（信イ）晋山，永安下，桂月庵開山（⟶永正10　再住　21代）
明　応　4（1495）	17代　功林宗勲再住（⟶文亀元退院）
明　応　5	春谷聖葩晋山（⟶永正14　再住　22代）
明　応　6	詢甫宗泉晋山
明　応　7	春栄清忻晋山，小田刈人松氏
文　亀　元（1501）	18代　玉翁禅珍（玖イ）再住（⟶永正２　退院）
文　亀　3	笑翁永忻晋山，永安下，普門庵開山

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

第三表〔永源寺関係宗派〕（『山上宗譜図』他による）



に和す詩の序に、

余初断宿攀於此山、今貞徳嘉隠老人、時主瑞石、相逢歓甚、殆乎如旧識、自尓後往還無虚

とある。備中貞徳寺は嘉隠の師松嶺道秀（興源寺開山）の開剏した寺で、『山上宗派図』によれば、嘉隠の永源寺入寺は文安二年（『瑞石歴代雑記』は元年とする）、康正元年の退院である。文章の調子から桃源の年齢を考えて、とりあえずこの年にかけておく。

（9）竺雲に漢書講義をうけたことは、

余昔陪于妙智翁（竺雲）漢書之講筵、聴相如伝、又就牧中学史記（一百）二十四、八（竺雲）余嘗親陪自彊老師之講筵、聴漢書（史）高祖本紀、八一二九一八八）

とみえる。その時期は、京大付属図書館清家文庫蔵『漢書列伝竺桃抄』司馬相如伝に、

其北一北ハ夏モ寒テ氷カアルソ、ヒロイコトヲ云ハウトテ、長禄三己卯今年コソ江州ノ湖ヲ……

と傍記のあることから、長禄三年の講義であることを知る。さらに『碧山日録』に左の記事がある。

等持院主竺雲和尚講授漢史、欲予侍其席、使龍子扣叔侍者於雲頂、問其日也、報十日有此講也（長禄三・五・三条）

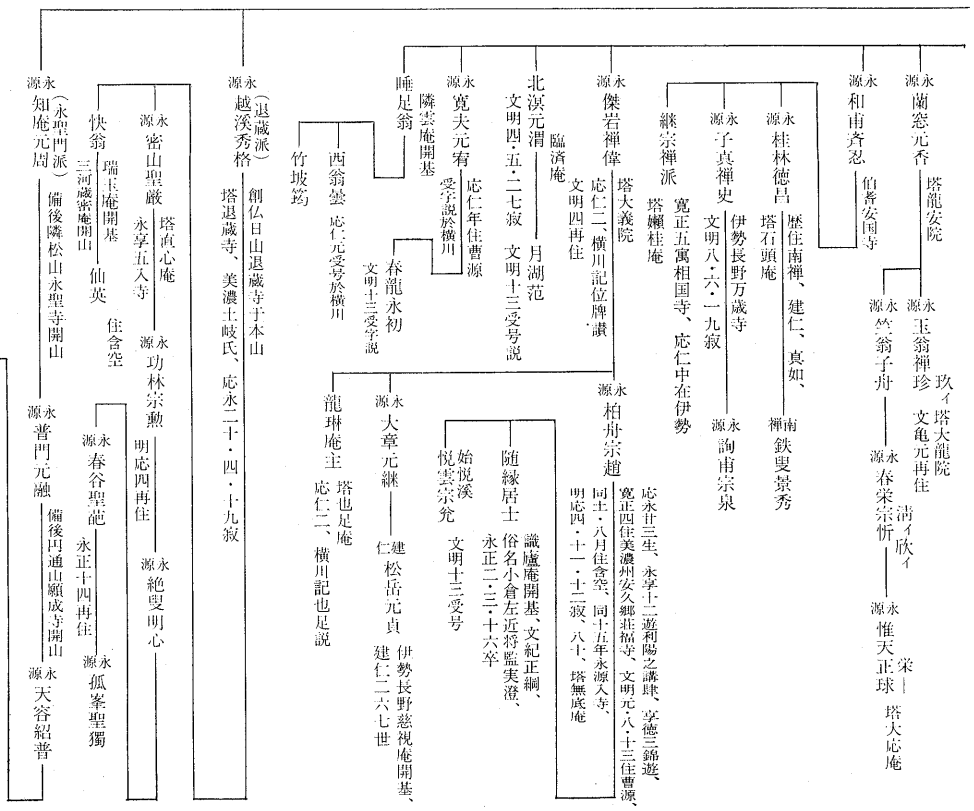
過北山之等持院、聴前漢之講、公孫公・卜式・児寛之伝也、竺雲和尚博恰内外、尤善於漢史、無書則暗誦空授、其克熟如此矣、壮時叢社有同名者、時人喚和尚、為漢書璉、以別之也（同十条）

赴等持院主漢史之講読、張湯・安也・延寿之伝、帰時問紹蔵主於浄居、具湯飯以見待也（同十七条）

赴漢書之講、杜周・延年・子夏之伝也、此日、以俗士明昌般若会請予、為有此講辞之（同二十二条）

これによれば長禄三年五月に行われたのである。さらに『竺桃抄』が原漢書巻一—三十、四十一—四十三を収めているのは、『史記抄』項羽本紀に「恵林（大岳周崇）・妙智（竺雲）ノ師行カ本ナソ、帝紀ノ第一カラシテ、列伝ノ四十三マテハ、聴聞シテ聴カキヲシテ置タソ、其中ニ二十二カラ二十六マテハ、用堂

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo



ノ死ナレテ、中陰ニ居タホトニ闕所アリ」「帝紀十二巻ト、列伝二十一ヨリ至三十マテノ聴書ヲハ、横川ノ借テ人ニアツラヘテ写ストテ、失ワレタソ」とする記事の中で、「二十一ヨリ至三十マテ」が「三十一ヨリ至四十マテ」の誤りとすれば、丁度相応することから、この『竺桃抄』がこの時の聞書であるとみなされている（『漢書列伝竺桃抄』柳田征司氏解説）。

竺雲は遠江の人で、天龍寺大岳周崇に師事した。大岳は足利義持の帰依をうけて鹿苑僧録を勤め、漢書に精通し、東坡詩の講抄を『翰苑遺芳』という。応永三十年九月十四日示寂。この大岳に竺雲は漢書を学んで「漢書璉」とよばれたのである。当時博士家では後漢書、史記の加点はなされたが（「師行」という）、前漢書には一部家点があったが全部にわたっては未加点であった。大岳・竺雲はこの未師行の書にはじめて加点した。（補1）史書を学ぶ者にとって重大な関心事で、桃源は次の様に整理している。

今史記家ト、漢書家トノ読クセヲ見ルニ、史記家ノ点ハ、猶モ念比ニクワシイ読クセカアルソ、漢書家ハ、尋常ナル文字読カマタ多ソ、サルホトニカ、妙智（竺雲等連）ノアソハスヲ、家ノ人ハマタモ、本式ニハナイトテ、ソシル人カアルト、古老僧ノアツタカ云ワレタヲ、貶所テ云ワレタト思タカ、史記家カラハ、サフ思フ事モアラウソ、妙智ノヲセラレシハ、史記ト後漢書トニハ、家ノ点本カアルソ、師行シタホトニソ、前漢書ハ未師行ホトニ、家ノ点本ハ、フツトアルマイト、ヲセラレタソ、サアアレハコソ、世間ニイツタウナカルラウソ、一条ノ関白殿ニハ、帝紀十二巻ハカリ、家ノ点本カアツタソ、サテハ、東山ニ昆布屋ノ山荘ニ、列伝カアリタカ、多欲テ、全備ハセヌソ、ツヨクシツシタ本ト見ヘテ、金銀薄紙ヲ以テ、有説ト面ニ貼メ、其裡ニ、師説ヲカイタソ、師説カ重宝チヤソ、史記ニモ師説トテアルソ、サテハ常徳・慶雲ト云寮ニ、一部折本ノ家点アリ、其ワサホトノ点テモナイソ、サル時ハ、未師行ハ治定ナリ、小々アルモ、全ハナイソ、往々ニハアラハヤソ、妙智ハ恵林院ノ御影カラ相伝メアソハシタソ、恵林ハ、家ノ人ニ伝授アツタソ、サルホトニ、漢書ノ家ト、我モヲホシ、世人モ心得タソ、既ニ師行カナクハ、恵林・妙智ノ師行カ本ナソ（史）項羽本紀、八―二九―八四）

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

このほかにも玉林昌旒の系譜をうける学統があって、これは後に中絶したらしく、続いて、「嵯峨ニ普明国師（春屋妙葩）ノ弟子ニ、旒玉林トテ、漢書ヲ読マレタソ、近コロノ幢立（瑞幢）之ハ其弟子ナリ、是モ漢書ノ家ト思ワレタソ、立之ノ法眷ニ西堂ノアツタカ、名誉ノ史学ニ達シタ人テアツタソ」「西胤（俊承）ノ弟子ニ、等慶上司トテ、史学ヲ専ラニシタ人カアツタソ、其ノ西堂ニ習タソ」「今ハ玉林ノ伝授モ絶ツ、漢書家ハ自彊ノ一派マテナソ」（八―二九／八七）とみえている。この引用部分に、桃源が喝食の頃、「ヲレハ三劉宋祁ノ本ハモツタリ、喝食テカラ、袖ニ入テ巣雲ヘイツテ、カクシ〳〵漢書ヲ習テ、帝紀ノ首メカラ列伝ノ二十四五巻マテイツタソ」と漢書を学んだことが出るが「巣雲」については未詳である。「師行」の系譜については、太田晶二郎「漢籍の「施行」」（日本学士院紀要、昭和二十四年十一月）を参看。

桃源は綿谷にも漢書を学んだことが後述の月舟「漢水余波序」に出る。瑞渓の綿谷行状に、中年以来間々後学のために漢書を講じたというし、横川景三も漢書講義をうけているので（劉叔字説）、同じ頃の受講であろうか。こうした大岳―竺雲―桃源の漢書学統を要領よくまとめたのが月舟寿桂「漢水余波序」である。

嗟夫一百年前恵林泰岳和尚（大岳周崇）、齢未弱冠、遠関（遊カ）左以学漢書、克駕其説、業成帰洛、至乎遊乎息乎之時、屢講此書、為禦侮資、授諸的嗣妙智竺雲師、竺雲師相伝而常開講席、於是乎東西刹之僧、攘袂而趨、吾邦書肆、未録此書而上梓、以故筆而聞焉、句而点焉、寿星姪綿谷（周蹊）、新写本文并劉宋新註而略旧註、然其点詳而功既全矣、妙智徒有甄叔陶者、全写本文、而談新旧註、然其点唯及半矣、其余写全部者、往々有焉、万年桃源老人、蚤歳有癖於遷固之書、就竺雲之与綿谷而学此書、且遭喪乱、東西奔波、所聞不及全部、然其所知過於所聞、蓋積学之所致也、文明中興之後、住京之等持、為綿谷姪文摠講之、始項籍伝、未幾又従鮮于雋伝而講之、所講不多、後遷勝定先盧、為亡友興彦龍講帝紀、龍嬰沈痾而逝矣、故帝紀亦不畢焉、老人有講、則予必侍席末、桃戟化後、景徐翁為門人祥雲屋開席、雲恵林仍孫、故有此求、予又侍焉、所惜其講唯止於帝紀、翁著帝紀抄、皆用桃老遷史之抄、予昔登二師之門、全聞帝紀、而粗迨列伝、所遺頗多、雖然聞桃之史講、吾肱三折、推彼及此、豈無小補、合史漢成一家之書、桃之遺意也（八―四一／三五五）

竺雲・綿谷の漢書伝授に関連する興味深い史料、両者の加点を集成した古本が江戸初期に幕府書庫に入ったことを示す記事がある。

近藤正斎『御本日記附注』（初稿本）四九丁裏にみえる「前後漢書　七十冊一箱」において、はじめ「前後各三十五冊、其〇匡郭（〇板）（朱書）、縦六寸八九分、横四寸八分、十行十九字、印紙瑩潔、堅緻、此際ノ鳥ノ子紙ノ如ク、字体精活、鐫刻妍朗、忽ニ之ヲ見レハ宋版ノ最も佳ナルモノナリ（如シ）、版心ヲ閲スルニ及テハ毎張大徳八九年刊補至大元年」云々とあり。さらに補記して「補刊元統二年刊ノ数字アリ、初テ元版ナルヲ知ル、實ニ元刻中ノ最絶ナルモノナリ」云々とある。自筆初稿本はこの辺り貼紙、書込等が煩雑だが、本所架蔵の清書三冊本は下巻初頭が欠けている。『近藤正斎全集』所収の『右文故事』はいうまでもなく改削後の文章を収めるが、ここでは初稿本を引用する。この後に漢書加点のことについて次のように記す（50オ）。

此本訓譯点竄甚多シ、巻首副葉貼簽ニ、文明三年辛夘二月七日、竺雲和尚唱滅（滅）於勢州某寺、齢八十九トアリ、次一行ニ、右松鷗、前漢史、本所白（自）書、号為瓠史（紀）記、故曰瓠本トアリ、又次ニ此亦紫点竄ハ篆初頡書記點、頡ハ恵林派、紫點句ハ、竺翁拾遺、青ト黄トハ梅花萬里、〇點句等皆止帝紀耳、其他（佗）ハ瓢史（紀）記、蕉雨桃源点句寫焉ト、三行ニ〇公記セリ、按ニ瓠本ノヿハ、南史ニ、蕭琛為宣城太守、時有北儒南渡、唯賚一瓢蘆、中有漢書序傳、僧云、三輔旧書、相傳以為班固真本、琛因求之、其書多有異今者、而紙墨亦古、文字多龍擧之例、非隸非篆、甚秘之、即チ是ナリ、韻府群玉及ヒ佩文韻府ニ、之ヲ引テ、瓢ヲ瓠ニ作ル、又竺雲ハ（中略）此本モト五山ノ傳本ニシテ、竺雲ノ訓点ト聞ユ、寛政年間、此本ノ蠹敗ヲ修補スルトテ、表紙ノ裏打ヲ剝テ、文明年間ノ反故数十張ヲ得タリ、内ニ五山ヨリ時ノ将軍家ノ徳日ヲ（徳日トハ賚日ノヿナリ、賚ヲ忌テ徳トス、猶病ヲ歓楽ト云カ如シ、「〇賚日ノヿハ拾芥抄八卦部ニ出タリ」（朱））書上スルモノアリ、将軍家ノ諱字、ミナ時将ノ親筆ナリ、又僧臥雲カ勇巴子英ヘ與ヘシ詩数篇アリキ、此本標題首行ニ、高紀第一上班固、漢書一（下略）

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

この書は元和二年十一月、駿府御文庫ヨリ江戸御冊子蔵へ移した時の駿府御書庫預林道春の目録に、江戸御書物奉行近藤守重の附注したものであったから、実に竺雲・万里・綿谷・桃源の加点を移した元版漢書が五山から徳川家康の旧蔵に帰していたことを語るのである。「紫點句ハ」以下は、頡書記・竺雲の点は紫、万里の点は青と黄で、これは帝紀まで、その他の点は松鷗（綿谷周瓏の号）、蕉雨（桃源の号）のものであることを示している。「瓠史紀」の所で「右松鷗、前漢史、本所自書、号為瓠史紀」とあるのは、『史記抄』項羽本紀に「前等持綿谷西堂ハ、愚カ聞タヨリサキニ、一遍聞テ、三劉宋祁ノ本ヲ書メ、クワシク點シテモタレタソ」、および月舟の「漢水余波序」に「吾邦書肆、未録此書而上梓、以故筆而聞焉、句而點焉、寿星（瑞渓）姓瓏綿谷、親写本文并劉宋新註而略旧註、然其點詳而功既全矣」とあるのを参照すれば、綿谷が三劉宋祁校本を全文写して所持し、これに竺雲その他の点を移した、その本のことを指すととれる。さきの「綿谷行状」にも「平日無所蔵之本、且書且聞、両年而帝紀列伝畢矣」とあった。これを蕭琛の故事にならって「瓠史紀」と呼び「瓠本」と称したのであろう。「史記」が必らずしも司馬遷の『史記』に限らず、記録がかりである史の記したものを史記と称することのあるのは、小林昇「六朝時代の史学」が説く如くであり、これにならうものか。桃源が同じく三劉宋祁校本を所持したことは『史記抄』のいまの記事のすぐ前で「ヲレハ、三劉宋祁ノ本ハモツタリ」云々とあった。「其他ハ瓢史記、蕉雨桃源点句寫焉」というのは、先の竺雲・万里の点のほかに綿谷点・桃源点を写した、という意味であろう。この本は、表紙裏打から文明年間の反故が出て、五山僧の将軍家徳日の書上と、瑞渓の詩がみられるなど、綿谷、桃源周辺の僧の所持本であったことは疑いない。今その人物を比定するのは難しい。横川景三『補庵京華後集』劉叔字説に「松鷗曾居寿星東軒、為余講漢書也、而□中未終其業、為可惜矣」とあり、月舟「漢水余波序」に、桃源が「文明中興之後、住京之等持、為綿谷姪文捻講之、始項籍伝、未幾又従鮮于雋伝而講之、所講不多、後遷勝定先廬、為亡友興彦龍講帝紀、龍嬰沈痾而逝矣、故帝紀亦不畢矣、老人有講、則予必侍席末」「桃戟化後、景徐翁為門人祥雲屋開席、雲為恵林仍孫、故有此求、予又侍焉」と人脈がみえ、また後年三条西実隆が永正四―五年にかけて書写した漢書は瑞仙の法脈に近い鸞岡瑞佐の所持本であった（『実』永正四・四・十九条、五・八・十九条）。景徐の桃源に受講した聞書が名高いが、そうした漢書抄と並んでテキストに加点を移す作業が数多くなされて学統を形成して、当該の漢書は右にみた人々の誰かが所持していた可能性がある。（補2）

三劉宋祁本について、『右文故事』巻三、前後漢書の項に詳しいが、その中で万里自筆の漢書についても言及している。妙心寺の南化玄興が万里自筆本を所蔵したというのである。はたして南化の『虚白録』巻三に「漢書記」と題してその冒頭に次のように記している。

此前漢帝紀十二巻余秘在書棚、而禅餘遊目於此書中者有年于此矣、夫此書之為書也、万里老人之自筆而老人尋常考史記通鑑之文、書其首以精詳句読也、不従師而解惑者此一書也、豈不珍貴乎此（中略）文禄乙未臘月中澣日華園虚白道人書東山下（宝暦三年刊本六丁）

南化はこの書を直江山城守兼続に譲り、その顚末を記したのである。文中に「不従師而解惑者此一書也」云々とするのは、未師行の漢書の学統を継承する学僧等の自習の精神を伝えて興味深い。また先の『御本日記附注』記事の中の万里手抄に係わる傍証としても貴重である。但し正斎はこの南化旧蔵本と、これと別に米沢藩に伝来された慶元刊本とを混同したらしく、（補2）にみえる平中論文はその誤りを指摘している。

ところで景徐周麟の後年の日録に、

三劉宋刊本漢書一冊闕分、還于禅昌、々々主自領焉（『鹿苑日録』明応八・七・九条）

昨暮、梅叔袖漢書二冊来、一者松鷗写本也、即以聴叫返於文捻、々々親領焉、一者禅□□宋刊本也、今朝拙老手度与于朝首座曰、此本重宝也、不可失焉（同十二条）

とあって、禅昌院細川政国が三劉宋祁本を所持したこと、綿谷の手写本は没後にその法姪で桃源に受講した文捻寿頭に譲られたことがわかる。この政国所持本は桃源の旧蔵本であった。『蔭』文明十七・七・九条に「前後漢書全部、細川右馬頭入道殿以廿貫文買之、予曾以廿五貫文自桃源方買

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

之、予近来赤窮之故沽却之、殊減其価者実可歎惜也云々」とあり、桃源―亀泉―政国と売却されたのである。

室町期の五山僧は前漢書を読むのに三劉宋祁本と師古注本の二種を用いた。三劉宋祁本は劉敞・劉攽・劉奉世と宋祁（景文公）の新注を収め、劉之問・黄宗仁が南宋慶元中に刊行した所謂慶元刊本が流布する。五山僧はこのほかに南宋嘉定元年刊本、嘉定七年刊本も入手して利用したらしい。別掲の平中論文が慶元刊本について詳述する。綿谷・桃源らはこの新注本によって学んだことを標榜したことになる。

牧中の史記伝授については、『史記抄』に繰返し触れている。

余嘗就慈氏牧中師学此書、中伝之師叔大椿翁、及其兄江心川首座（扁鵲倉公列伝）

余昔壮年之日、就牧中翁而学此史、本紀至周之半、列伝及相如之末（日者列伝）

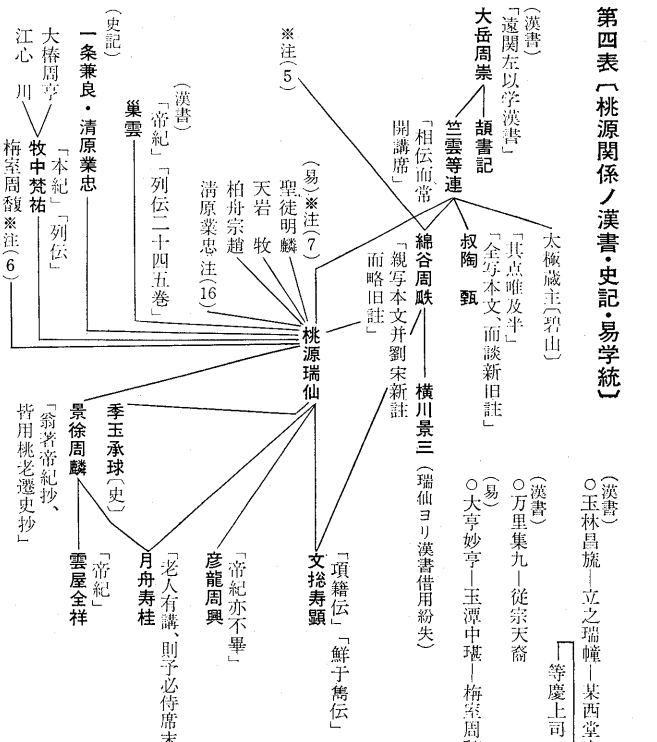
史記本紀、牧中之講止周武而已矣（周本紀）

余嘗親陪自彊老師之講筵、聴漢書、復従学史記於牧中、中之史記伝之、其師叔大椿与其師兄江心川首座、其漢書亦聴之（高祖本紀）

牧中は夢窓派の人で、史記を大椿周亨から学んだという。玉村竹二『五山禅僧伝記集成』によれば、大椿を師叔とするから、義堂周信の直弟である大椿と法の兄弟（ひんでい）に当る某人の弟子、義堂の法孫に当る。某人は不詳であるが、牧中が義堂の塔所南禅寺慈氏院の塔主であったことから、同院塔主の柏堂梵意か、大基中建ではないかとされる。長禄三年、京都万寿寺（諸山）に住し、大椿とその法兄江心□川首座に史記を学び、これを桃源に伝えたのである。以上の学統を整理したのが第四表である。

ところで漢書学統は、先の未師行の文脈の上で眺めると、単に漢書伝授の系譜を示すのみではなくなる。博士家が領導する訓点世界に空白の部分があって、そこへ五山僧が数世代に亘る実績の上で新たな加点本を携えて進出した、その系譜でもある。「既ニ師行カナクハ、恵林・妙智ノ師行カ本ナソ」という揚言はこの新しき者の自負である。月舟の「漢水余波序」が冒頭に、

第四表〔桃源関係ノ漢書・史記・易学統〕



吾邦以儒為業者、其家有二矣、世謂之紀伝、経伝、経則中家清家之外記掌焉、紀則菅家江家南家掌焉、……凡明経者暗於紀、精紀者踈於経、咸是玉砕而不克全焉、……竊以天下歴応仁之変、諸家共籤、悉委秦燔、然後儒林凋喪、無面受伏生者、何況江家之亡既久矣、南家雖在、不嘗伝業、菅家亦綴旒耳、

と述べたのも、旧体制に替ろうとする叢林の向学心が省りみた博士家訓点世界の衰退である。

さらに月舟は「史漢ヲ合セテ一家ノ書ヲ成スハ桃源ノ遺意」とのべたが、史漢を合わすとは、未師行と師行とに相渉ることであった。それは未

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

師行の空白をうめることのその前をゆくことを意味する。桃源は次のように記す。

如前紀伝之在史漢者、凡一百四十一人也、故其遷固之所筆、大抵同、而倭人之口授、不能無小異也、学史記者、各以家本倭点為據、倭点又不一焉、読漢書者、又以師伝音訓為本、而其授受之間、或有舛差焉、是以両家相非、雌黄紛然、蓋子長(司馬遷)・蔚宗(范曄)之書、師行于日域、則據家本可矣、孟堅(班固)之書、未師行、則本於師伝、亦宜矣哉、史有史本、漢有漢師、未必混合為一也、学者不可不知之、各其以平心論、則史記乃太史公作于先、而本朝菅・江・良三家之名儒、承之加点者也、漢書者班固述于後、而諸儒又秘不加点者也、夫猶可以史記読漢書、而未可以漢書読史記也(史記高祖本紀)

史記と漢書は記述する内容は大抵同じである、にもかかわらず日本の口授では事情がかわる。史記には史本があり、漢書には漢師があって、両者が合一されることがない。先行の史記が基になるべきであって漢書を以て史記を読むべきではないとされる。と桃源はここで一拍を置いて、この意見が師行の立場からである、そのことに触れず、この視点を無視して自らの立場を表明する。

余嘗親陪自彊老師之講筵、聽漢書、復従学史記於牧中、中之史記伝之、其師叔大椿之与其師兄江心川首座、其漢書亦聽之(八一二九/一八八)

五山僧の史記漢書の学統を示す史料として既に旧聞に属するが、この記事の意味はもっと注目されてよい。右の数行は、先の博士家の史記優先論に対して、自分が師行の書である史記を学んだのは、博士家ではなく、叢林の先学からであること、さらに同じ師から未師行の漢書も伝授されたことを告げた記事なのである。桃源には自分にとって、師行・未師行の別が無意味であることを主張する意志があったといってよいだろう。結論は次の如くである。

自彊云、如余之意、史記之家点善者、雖漢書可加焉、漢書訓之勝者、於史記亦可読而已矣、自今以後、合史漢成我一家之書、不亦宜也哉、取余説者、勿謂糅矣(八一二九/一八八)

勝れたるを採って読みくらべ、漢書と史記とを等質のテキストとして読みほどく、この自明であるかにみえる一種の合理的姿勢は、当時の閉鎖的家学の体制下にあっては、攻撃的にすぎると映ったかも知れない。これを受けて立つべき旧体制内部にはこれに抗する活力がなかった。むしろ唯一の例外であった清家が五山のこの活力を摂取するのに努めた。先の『竺桃抄』はその一部である。末尾の「糅」は「ごちゃまぜにする」の意であり、「取余説者、勿謂糅矣」とは、桃源のユーモアである。

(10) 『雲桃鈔』の桃源識語によれば、桃源と万寿寺梵嘏が発起人となって、長禄三年春、東福寺宝渚庵に講筵が開かれた。途中、寛正二年は、飢饉等の事情によって休講、その後は寛正三年のこの日まで、四年に及ぶ講義である。聴衆として名を挙げているのは、相国寺―益之宗箴・月翁周鏡・笑溪□權・暘谷中杲・叔鳳□逸・菊英□藹・亀泉集証・月卿□規・寿春妙永・横川景三・万里集九・芳洲真春・景徐周麟、南禅寺―希世霊彦・利渉守溱・蘭坡景茝、建仁寺―正宗龍統・天隠龍澤・桂林徳昌・古雲智云、東福寺―大痴為学・春暉永春・岷江士原・天覚宗綱・桃溪桂悟・季弘大叔・春湖清鑑で「臨其席者、皆一時名勝」であった。

雲章が清規に関心を持って日頃清規を講義したことについて、翺之恵鳳の「雲章禅師行実之状」は「平居之日、恒講百丈古規、以縄其大終於邪曲之帰者、概考長蘆山澤山東陽諸家之言、自其旧貫以并一焉、名曰清規要綱、自乙卯(永享七)及今日辛未(宝徳三)、凡一十七年未曽脇沾席矣」とのべる。「長蘆」云々は、崇寧二年(一一〇三)序文の長蘆山宗頤撰述の『禅苑清規』、至大四年(一三一一)澤山弐咸の『禅林備用清規』、至元二年(一三三六)順宗が東陽徳輝に命じた『勅修百丈清規』を指す。その他少なからざる清規類の伝来について、上村観光「本邦に於ける百丈清規の流布」(『禅林文芸史譚』)、今枝愛真『中世禅宗史の研究』第一章第三節「清規の伝来と流布」に詳しい。また『東福寺誌』に引く『百丈清規』の翺之の跋は上巻に「長禄二年戊寅五月六日　古筠木稷叟恵鳳」、下巻に「永享庚戌(二年)雲翁請東陽清規於凌霄、乃勝剛禅師所乞也、今廿九年云々、稷道人慧鳳敬書」とする。永享二年から長禄二年の廿九年にわたって勝剛長柔の請に応じて勅修百丈清規を講じたことになる。桃源らへの講義

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

はその直後にあたるが、勝剛の聴書は伝わらない。

雲桃鈔が叢林内部で重用されたことは、先の季弘大叔が借用を申入れた『百衲襖』記事や、後述する芳郷手沢本の様子が語る。大日本史料が引く妙心寺隣華院所蔵『百丈清規抄』には、雲桃鈔本来の本奥書の他に、(イ)永禄十年八月六日、甲斐成就院恵璨の書写奥書と、(ロ)天正八年七月廿日以後の南禅寺鉄叟景秀の書写奥書とがある。(イ)(ロ)の関係はかなり不鮮明で、(イ)は恵璨が少時伊勢無量寿寺で笑雲清三の講義を手抄した祝釐章・大衆章・日用規範并序跋をもとに常庵龍崇加筆の清規抄と桃源抄を併せたことを示す。(ロ)には常庵龍崇が建仁寺霊泉院で大永三年から二三年にわたって講じた時と、その後年次不明だが再度講じたときの、鉄叟の両度聴書に桃源抄を加えた抄七八冊が、その後の騒擾に紛失して二冊だけが残り、これによって天正八年五月から七月にかけて鉄叟自身が講義したこと。さらにその後妙心寺南化玄興の講義があったが鉄叟は八十五歳の高齢で、十分の一も聴書を作れなかったことが記されている。

発起人の天祐梵嘏は夢窓派の人で雪心周安の法嗣、春屋妙葩の法孫で寛正年中には万寿寺に住していた。注(6)にみたごとく、享徳二年に建仁寺正宗雅蔵主に碧岩集の講義をうけて、これに綿谷と共に桃源も列席していた。『臥雲日件録』によれば、天祐は宝徳元年から三年十二月まで瑞溪周鳳より杜詩の講義を受けている。瑞溪が西胤俊承、惟肖得岩、厳中周噩、子瑜元瑾、元璞慧珙から聴いた講義に拠るものであった(宝徳三・十二・十七条)。積極的に講筵を設けて叢林内部の学芸興隆のために友社間の交流をはかった人らしい。天祐の示寂年月は未詳であるが、小槻晴富のために著わした「大日本国史家壬生官長者文庫記」には「文明六季龍集甲午春王正月十一日、前南禅天祐梵嘏、六十六歳、書于京師万寿覚雲窓下」とあるから、寛正三年には五十四歳で、桃源より二十一歳の年長である。

建仁寺両足院に『勅規桃源鈔』と題する四冊本が所蔵され、芳郷光隣の手沢本である。巻末に安永五年の高峯東晙補装識語があり、それによれば高峯が書賈から購入したとき、「随方毘尼」と題していたが、内容が雲桃鈔であることを知って買ったものらしい。毎巻芳郷の印記が捺してある。

第二冊末に

明応五丙辰冬、此一冊盛光院主音叟潮公首座筆之、明六丁巳五月念五日正校了、音叟公明六巳正月八日盛光火災、即席自殺矣

と本文とは別筆の識語がある。第二冊の筆跡は仮名書の部分の、ノ・ソ・ル・レ・テ・ウ・シ・タ等の斜め上下に引く線の長いのが特長で、他の三冊と際立つ違いをみせている。この一冊を書写したのが音叟潮首座という人で、出火の責任をとって自殺した後、識語筆者が校正したというのである。各冊の本文筆者は異なり、何人かの僧に命じて書写させたのであろう。識語と本文書込は同筆で、芳郷光隣の筆跡と思われる。芳郷の校正は第二冊に止まらず、各冊にわたって、単純な字句の校訂から、参考事項の追加、雲桃以外の僧の意見伝聞など、多様な記事が貼紙、頭注、余白書込みによってなされている。芳郷は一応の本文校正をした後も、折に触れて加筆したのであろう。各冊の書写の時期は音叟と同じく「明応五」年前後とみてよいだろう。

(11) 景徐に託して横川が万里集九に送った詩が収められている。その序に

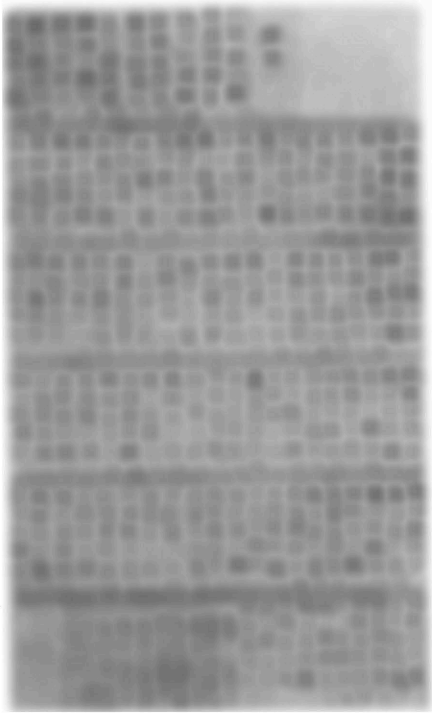
応仁戊子仲春廿又三日、景徐侍者、往草野省二親、余与桃源、句而餞之、竊聞、万里老人所居、近于草野、喜不可言、仍書此句、寄呈老人、蓋欲知余未作鬼録也、抑兵火以来、輦寺一燼、諸友乱離、地角天涯、意緒万端、不知所以裁也、事々付景徐口実耳、自去歳八月、避乱於此邦、餬口於桃源、

とある。その頃万里は草野から近い大原正伝庵に仮住していたのである。

この聯句を清書した横川自筆本が現存する。南禅寺天授庵所蔵の「聯句」と題する軸がそれである。昭和五十八年三月、京都国立博物館における「南禅寺の名宝」展に展示され、一見することができた。もと巻子であったのを軸に改装したらしい。桃源横川景徐の連句百韻で、同展カタログに図版として収められている。解説に景徐の「応永元年九月」に続く二度目の訪問時のもの、としているのは思い違いで、景徐は前年九月の下向以来、慈雲庵、龍門庵に同居していたのである。軸の跋文に

仲春廿三日、景徐侍者往草野観省二親、余与桃源賦之以餞、后一日有

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo



横川自筆景徐餞詩（『南禅寺の名宝』）

客出紙請書、然韻険而句拙、読之如酔語之無倫次、可咲、峻拒不允筆而贈云、横川景三拝囲

とある。翌二十四日の横川の自筆である。なお応仁二年三月日の日付けで近江牛山住の益之宗箴が出した書状に「横川丈人、則与桃源・景徐二公、同寓江左山上龍門菴」云々と書いているのは、このときまだ益之の許に景徐の草野行が知られていなかったことによるだろう。景徐はその後翌年まで草野に居ることになる。応仁三年二月六日、龍安寺僧が草野から景徐の書状を横川の許に持って来た。

(12) 景徐が草野へ去り、さらに横川が上洛するのは桃源にとって身辺が寂しくなることで、最初に横川がいい出した時に「叮嚀留余(横川)」とある。横川が「此別非別、近則十日五日、遠則不過晦朔爾」と弁明し、経に怨憎会苦、愛別離苦というが、君もこれに泥むかと問いつめたので、笑って留めるのを止めたという。

横川は父母にも早く別れ、嗣法の師曇仲にもその寂後に頂相を拝して嗣法したので、龍渕に養育にされた恩義をとりわけ感じたようである。横川自身の言葉によれば「余不幸而喪父母也早、又不幸而不見我師曇仲、自幼年養于師兄之手、以到不惑、如日之照如春之育、実我父母也、熱喝麁拳、日問月学、実我師也」という（寄桃源詩并序）。これより先、横川らが市村に着いた当初、龍渕は市村から六里程の篠原正法寺に居た。横川は群盗に路を塞がれて訪ねることが出来ず、桃源と謀り使を迎えに出したが、龍渕の方でも数度にわたって賊のために逐われて断念し、その後龍渕は上洛していたのである。出立後、横川は箭橋から舟に乗り、大津で下り、松本大興寺に師叔仙岩澄安を訪ねて、翌朝関山から東山今熊野に至り、養源軒に龍渕を問う。その直後龍渕は急死する。

横川はその終焉の様子を「喜余生還、手舞足蹈、後二日、師兄一臥不俄起(起、俄然カ―ト新集ニミユ)龍而逝、蓋中風也」と記す。

瑞溪の「小補東遊集后叙」によると、横川は葬儀が済んだ後、叡山に登って横川慈恵塔に詣で、下山して北岩蔵に瑞溪を訪ねたらしい。この時近江での詩文稿をまとめて持参したが、瑞溪が「老眼難読」ということで両三篇を誦して聴かせた。一宿して翌日、鞍馬寺に赴く。「観音賛」によれば、五月十八日のことで、瑞溪を訪ねたのは五月十七日になる。龍渕の寂後一ヶ月である。その後二十日余経て、横川は詩文稿を清書して再び北岩蔵に赴くが、この間五月二十一日に五七日仏事、六月六日尽七日仏事を修した。五月二十七日北岩蔵松月庵に一宿しているから（「天満自在天神」）、この頃は東山と北岩蔵を往還したことになる。その頃桃源から手紙が届く。「寄桃源詩并序」に「然而桃源寄書、招余懇切甚、書頭而去思、書尾而来暮(墓)、外無他語矣」とあって、桃源の寂寥が思われる。「然而」の部分は横川に対して一所不住を勧める瑞溪の諫言に係るところで、横川は近江を離れて漂泊の旅に出ることを考えるが、「余謂、師兄去後、憐余孤陋者、未之有矣、而猶北禅(瑞溪)教于上、桃源養于上」と省りみて、結局近江に帰ることになる。この時横川が桃源に贈った詩は

上京百日走兵間、君屢招吾再入山、昨夜松風当枕起、猶疑諸将凱歌還

という。龍門庵に帰った月日は判らないが、詩中に「上京百日走兵間」、序に「其間僅百余日」とあるので、七月下旬には帰っていたのではないか。八月二十四日には桃源と柏舟母の葬儀に赴いている。

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

(13) 桂林は石頭庵の開基で、文明元年にみえる継宗の師である。桃源とは親交があり、応仁二年夏、伊勢に赴いた。天隠龍澤から桂林に宛てた書簡に横川・桃源のいる永源山中を羨望して

桃源老人、雖来近邑、不入帝城、以故欠面稟、横川、季玉、相継趨重、山中社友、恐其以二公為竹林山王乎(八―二九―一九一)

又承、横川、桃源二老、同在邑中、晨夕晤(唔)語否、斯数箇英衲、聚頭於飯顆山下、呑山緑吸湖光、吐以為文字禅、他日必名某山然禅窟、江州独何幸哉、願借之者一年、以光耀帝都也(八―二九―一九二)

と叙している。近江において両者の指導する小世界が在京の諸僧にどう映ったかを語るものとして興味深い。

この年の桃源に直接関する史料は少ないが、横川の方は識廬庵にあって、近隣の真俗との交渉が著しい。彼等のために製した法語、詩文、字説等は『続集』に収めるごとく多量である。その傍らに在って、桃源にも少なからず文章活動があった筈である。

(14) 『補庵京華前集』冒頭に「余号補庵、集名京華、皆岩栖希世□(所)命也、文明四年壬辰、余自江州入京、樵雲虚寝居焉、寓筆硯於永徳者数月、京華集始於此云」とあり、その巻頭の「書天龍国師自賛後」に「龍集壬辰孟夏吉辰」とあるから、四月中の上洛とみえる。相国寺樵雲軒に暫く居た後、永徳院に移ったのである。この後、細川勝元が常徳院側の慶雲院故地を譲り受けて小補軒を建ててくれ、ここに横川は常住することになる。『前集』書臥雲老師畫軸詩後に、「文明壬辰(四年)、予適入京、於是前右京兆源公、買近城宅一區、留予而住、小補庵是也、有軟紅之撲面、而無空翠之湿衣、何今昨相反之如此哉」とある。

山上から市中の生活へと戻った横川と桃源とは、以後桃源の上洛まで各々別の世界で文筆活動に入る。横川に従って山上から春栄宗忻と子韶本偃が小補庵に同居した。翌五年五月十一日に細川勝元が卒した。

(15) 諸僧の詩が大むね揃った文明六年二月、横川の作った序に成立の事情が詳しい。

此軸為小倉文紀居士所設也、先是文紀聞余困京華、以詩見招、冗中未遑裁謝、為慢不少、於是率洛下諸老、和而答之、天隠叙前、蘭坡跋後、余尚何言哉、一詩列其次耳、適礼部源公(京極政高)、館於城中、一日話次及之、公乃賜和、豈非居士終身之栄乎、蓋平日忠肝義膽、無貳於公之所致也邪、平賊之日、以此詩入凱歌可也、抑桃源・子真・桂林・系(継)宗、此四老人者居士之所畏敬而皆余故人也、請使各賦之、塡紙空處、幸甚

この詩軸が現存する。かつて「牧野文書」として、蘭坡の跋が大日本史料文明元年十二月二十五日条に紹介された。その後牧野氏の菩提寺である岐阜県付知町宗敦寺に所蔵されるに至ったもので、昭和四十八年十二月、玉村竹二氏の御紹介で同寺を訪れ、この詩軸を閲覧し、本所針生邦男氏が写真撮影した。口絵掲出の写真がそれである。各々の自筆、地名、印章の鮮明な一巻である。全文は『五山文学新集』別巻一「詩軸集成」に翻刻されているが、写真による紹介は初めてであろう。実澄の詩「天涯一別水雲郷。日々柴門望雒陽。松社有盟君記否、乾涛声落月明床」に依って詩を寄せたのは、天隠・希世(霊彦)・益之(集箴)・亀泉(集証)・春陽(景杲)・有隣(霊翰)・景徐・季玉(承珙)・斉龍・桃源・継宗(瑞派)・桂林(徳昌)・蘭坡(景琨)・横川・京極政高である。当時有数の詩僧の自筆を聚めるこの詩巻については別に論じたい。今は本論に関する諸僧の手蹟をみる好材料として掲げる。

(16) 通釈は孔子の易繫辞を注した朱熹の易学啓蒙をさらに注釈したもので、桃源の周易抄『百衲襖』第一冊に、この三者の関係を予め明らかにしている。

易大傳――易大傳トハ孔子ノセラレタ繫辞ナリ、啓蒙ハ大略繫辞注チヤソ、此ニモ一段アケテ本文ニシテ、文公ノ説ヲハ一字サケテ注ノ様ニセラレタソ、……龍馬―又一段サケタソ、此細字ヵ胡方平ヵ通釈也

試みに、清の納蘭成徳編『通志堂経解』第三十二冊所収本に拠れば、その各文章の関係は桃源の言う通りで、木活字の大きさも区別している。桃源は易学啓蒙を清原業忠に受講した(〔百〕五)。『百衲襖』は慶応大学付属図書館蔵本(有欠・十九冊、二一〇・一六五・一九)に拠った。同館田中正之・白石克氏に深謝申

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

上げる。本所には識語を抜萃した『百衲襖』（両足院本写）（二〇二二・一）『百衲襖 識語 抜萃』（上村蔵本写）（二〇二二・二）が架蔵されている。（補3）

（17）『百衲襖』十二 識語に「乙未中秋（文明七年）後一日、忽憶去年今日 始入易講筵、光陰如過隙之駒、已至一期、是以此卦至廿又四日、前後九箇日抄畢」とある。

（18）閏月算法の部分、通釈記事を越える多量の記載があり、図表その他も多く挿入されている。この点について「右閏月算者、已有旧解、而尽美矣、然只有積朔虚之一図耳、余不能通算術、故就明其法之人、以質之、毎布一算、写以入図、雖一乗一徐之間、無不上図、而列于各図之左焉、使不知算法、按此図、則一覧（マヽ）孱然矣」（五、46オ）云々と自負する。ここにいう旧解は、柏舟と葭玉の二老が足利学校で易を学んだことをのべて「至於閏算、雖有師説、甚不暁了、二老相倶校讎撰之」としたそれを指すのかも知れない。

（19）同じく通釈を超える記事多く、中に七政之図・璿璣玉衡図・十二次日月交会図・二十八宿宮分之図・晦朔弦望之図・二十四気七十二候之図・昼夜百刻長短之図等があり、とくに須弥山についての詳述がある。巻尾に「文午小春念四之夜三更抄此篇畢矣、余之貧与寒倶徹骨也勝去年、焚無膏油、猶分延丈之燈焉、死灰翁志」の識語がある。

（20）識語に、山中の生活による身心の疲労と学業健康の不安をのべている。炊事の世話をした僧が庵を出て一日一食の暮しとなったらしい。異常に緊張した日々であったことになる。識語に

此冊始于二月之下澣至暮春二十又四而畢功矣、余也比年為山嵐瘴気所侵、而衰病相加、為廃人也久焉、雖不以文字業之、動如故疾復発耳、有斎則赴、客来応之、養花桃菜（菜イ）之外、都無一事、往来于懐、有興信筆抄纂、不敢行于世、只待尽残涎而已、不知自此以往、又至幾巻、時積雨不晴、溪声激怒、開窓杜鵑花、或紅或黄相映発、寄声林間婆餅焦也、数日之先、夏子辞去、不利享（煮）粥、毎日一食、数枚僧手炊、然雖山中之佳味、而余之薄福、一至于此、胡盧〻〻、乙未三月、

第二十冊識語に「乾一卦、乙未（七年）二月下院（浣）而始抄之。至三月廿（四カ）而終焉、尓来以衰疾不復課矣、八月十六日坤无資生」とあり、この後坤伝は八月まで遅延する。

（21）識語に、この頃の桃源の生活を記す。

此日為時正之初、然已日短而夜永、家貧無油可焚、禅罷便仰臥而已矣、喫粥了、晨誦纔罷及斎時、得箇寸晷以抄写、斎罷仍藹圭之携披詩来、為講者三紙、其席未散、菊上人袖碧蕨習句読、大抵率以為常、或時為淑生授聯珠、或時為尤子教十牛、餬隣寺則出于卯入午至、晡打板看経、蓋応校尉（小倉実澄）公之命、祈保官軍之進伐云、老矣、住庵如此多事、豈不為有識者而面無漸色、是以此卦至廿又四日前後九箇日抄畢、嗚乎、有年今幾耶、朝忽暮擾一至此極矣、不敢言此抄之不成、而言世縁之未浅焉耳、坡仙所謂無事静座、一日両日之言、於余也風馬牛乎、雖然挙足下足、嗣屎放尿、苦楽順逆、道在其中、則日用不離四威儀中、無作而作、無説而説、山青水緑、一易也、露往霜来、一大極也、講至駅年抄更到駅年、本是歌羅管裏米強年、豈不快哉、々々々々、八月二十四日記、

（22）識語に「文明第七九月初一日晡時抄此卦畢、斯日々食之陰雲四合不見、是天尊陽之意不欲使下民見其象也、逆順之理可知矣、況官軍已逼於賊畺、其勢不可久也、為臣不忠於其君則敗亡、可拭目而竢」とする。この頃、近江の軍勢の動きが激しかったことは九月七日条に出る。

（23）この卦の抄は十日に始めて、十二日に抄了。識語に近江争乱の様子を叙述するのは、桃源の強い関心を語る。末尾に「吁天者在上、地者在下、日月猶出于東没于西、則天定而後勝之理其未可泯滅乎、此挙有多合此卦之象、散抄中往々及於此而已焉耳」とする。

（24）識語に「十又四日宵分剪灯抄了、斯日珀上人来告曰、欲転般若以保安檀越校尉公軍幕如何、余曰、江州之恢復繋于此公之一挙、不可不祈其福矣、斎罷、就識廬菴抽丹梱而諷読、至晩間満散、檐雨琅々、如助梵唄、天旦弗違、而況於人乎、況於鬼神乎、今日申日也、日吉之加被其庶幾乎」とある。末尾の日吉云々は、叡山僧徒が京極氏に加担して多賀豊後守の出雲か

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

らの帰来を待っていた近江の情勢を指すのであろう。

(25) この卦の解釈「密雲して雨ふらず、わが西郊よりす」「密雲して雨ふらざるは、なお往くなり、わが西郊よりするは、施しいまだ行われざるなり」「既に雨ふり既に処る、徳を尚んで載つ」云々に因んで、かつて蘭坡景茝の説いた長安独り西風にして雨ふるの説を想起して、その説の正しいことを確認し、更に叢林英衲の文名を論じて、蘭坡の人と為りに及んでいる。蘭坡については後述する。英衲を論ずるに際して、竺雲と瑞溪について筆を改めて大恩を謝しているのが注目される。両人については学統に関連して別に述べた。

実澄の伝言には「此日有人従陳中来曰、官軍又将逼於賊城、部署已定矣、小倉校尉亦伝語見招、先遣珀僧略叙向来疎濶之意而已矣」とある。

(26) 識語に「此卦昨夜禅罷始染筆而至今宵之未宵分抄畢、風雨打窓、灯影明滅、若非相忘於得喪悲歓、吉凶悔吝之外則十年前事、不能不一往一来于懐矣、砂礫裏油尽欲起添之、如懶河亦懶是真乎、遂吹滅而睡耳、晨重陽日記」とある。

(27) 識語に「二十一日蓐食、応校尉公之招、而赴其軍幕、至則公被堅執鋭率士卒而出、聞余至、下馬即叙向来不面者之久、余欲帰不可曰、今之出也掠党賊之邑而已、非移陣営於他処、晡時来必矣、以故就私第而飯、其羹有松蕈豆腐等、……此夕公帰、廼召幕下諸賓、飲之酒、蓋労之也、及昏黒、将携余宿平生菴、出門客復至、唯余独与二三子去、夜半敲門至、佳話移刻、又有客而来、少焉就枕而睡」とある。

(28) 識語に「瞽者新一云者来宿、演平史三章、有其曲調可感人之心者、新字以倭訓呼之、蓋瞽者不解書字又得見之、但以字音為験、故避同声者如此云」とある。文字と音訓に対する関心は桃源の音韻への関心に連なる。

(29) 松茸は桃源の好物であった。識語に「赴永源丈室而斎、蓋有僧某甲、以得松蕈而請余、松蕈乃余所好之物也、松蕈之為物也、雖不詠于詩、不記于傳記、百家之説然風味為不浅、則其品必在参寥黄可之右乎、況禅居大鑑師為之作偈、以称賞哉、大鑑廼真丹名勝而在日域為百丈、則置之牙歯之余論者於蕈豈非衮褒耶」とする。

(30) 識語に「寒気侵肌、勅厨細剉蔓投之多水少米之粥、与衆啜、俗諺所謂増水云者也、恵峰郷談之謂楊花、蓋取乎糝之径之義云、又糝羹之類乎、嗚乎、豪富家視此等物、不足以唾擲而已、但解宿醒之晨為有功則、酒客時或一笑下箸、亦是氷壺先生之流亜矣、我輩得之如天蘇陥味、其寒酸可見、少焉、如則者如織、豈為水之多耶、呵々、三更後也」とある。

(31) 識語に「午後、有嚢括盆子而至者、開之経霜紅柿也、中有片紙書和歌一篇、蓋集雲峰下主人志高長老所戯贈也、顧余四十年于江之西、于湖之南、于洛之東西、以吟風嘯月為業焉、然至和歌不得措一辞、故不知所以裁返章、為之奈何、原夫、吾七朝帝師、曾長於此、到処吟詠、不知其幾千万首、其風韻也、未必滅西行法師之製作、至今皆膾炙人口者為不少矣、亡父年登居士、亦以此藝鳴者也、曰真曰俗其緒也墜矣、豈不遠帝師近亡父哉、昔集雲峰下小釈迦、得一顆紅柿、与瀉山老漢、作父子商量、実千載佳話也、若論此事、雖親見帝師、猶有不譲者、亡父未夢見在在、何故好児不使爺銭」とする。

夢窓疎石が和歌に秀で『夢窓国師御詠』のあることはよく知られている。夢窓の巨細について、玉村竹二『夢窓国師』(平楽寺書店一九五八年)を参照。夢窓和歌の意義については、今泉「工夫の世界、夢窓疎石」(『日本歴史展望』第五巻、旺文社一九八八年)で寸考した。参看を乞う。夢窓が『大恵書』を必読の書としたごとく、桃源も『大恵書』に魅かれた形迹があるが、夢窓が、「言語不通」の問題を介して、和の側から大恵に接近するところに和歌があったのに比して、桃源は漢の世界に没入するところで大恵に接していた。彼が和歌を必要としなかった理由はそこにあるだろう。この問題は禅僧における和漢の問題として別途に論じなければならない。年登居士が和歌に長じたことは、他に伺いみたいくつかの材料と併せ見て、室町中期の被官層で学芸の素養ある典型的な武将像を思わせる。桃源の名教論はその血筋を享けるものであったろう。父を語る時の筆調は明るい。

(32) 識語に、かつて雲章の清規講を聴いた時、十月を陽月とする根拠が詳らかでなかったが、この日朱熹の剝卦の解釈を読んで判然とした旨がみえる。陰の陽を剝することについて、その詳細は易学の内容に亘る。本田済

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

『易』を参看されたい。末尾に

丁亥以降是小人之剝也、不可謂世無君子、但未到其道之復也、而屯難之勢不過於一年則其有待于此乎、今慈八月官軍有征、未決雌雄、已及陽月其剛陽之萌芽乎、偶当此月而抄此封、故及此云、

とするのは、桃源の易の予言能力に対する信頼を示すものであろう。このことは九月十二日、十月十九日の抄にも見えることである。

(33) 識語に「又按上六迷復与江賊合符節者也、山名氏便休復也、一色氏頻復也、有独復者、有敦復者、防賊衛賊者迷之魁乎、至於江濃之二賊、其迷之奴隷也、迷而不復、終有大敗、実誅而不赦之罪人也、余罵賊之癖、不減於翦之、不知道而難論也」とする。上六（一番上の陰爻）の爻辞に「復るに迷う、凶なり、災眚あり、用て師を行る、終に大敗することあり、その国君に以ぶ、十年に至るまで征する克わず」とあるのが、六角氏をよく説明するというのである。六二（下から二番目の陰爻）の爻辞「休く復る、吉なり」は山名氏に、六三の「頻復」は一色氏に当る、という。その飜読と解釈は本田済『易』による。応仁の乱を論ずる時桃源の視線は近江に向けられ、その論は、乱一般というよりは、具体的選択の議論として、自己の名教論を、近江諸将の政治的向背に対置する気迫がある。ここにも現実に対する判断停止の境地を希求する悟達の途よりは、知において現実と関わろうとする桃源の資質がみえる。その論の特質である。「独復」は六四、「敦復」は六五の爻辞に出る。

(34) 識語に、

其夜延東綿買豆腐及百済寺美酒、相暖于庵中僧而及鄰庵、而衆皆作挾纊之思矣、所謂豆腐者截之作三四寸許、以竹為串、各一串穿一箇、而以醬擂而塗之以為炙、其風味也為不浅矣、所恨者其香襲人不消而又及遠、故叢林言風流者、不克無慊焉、是以近来有出一奇者、未印塩致而白以炙之、以所擂之醬、而別器煑之、以其所炙者入之、則其香之浅者十七八也、故雅其名曰海棠、於戲乎、昔恨海棠無香、今恨其香、其於渕才也、寔風流之罪人也、鄰者謂之田楽者、其形有類也、所謂田楽也者、優倡之円其顱者、而其衣裳皆紅色也、其初場曰中門口、然後有刀王云者、有高脚云者、今之所取譬者、与彼乗高脚者相似也、夫海棠之於田楽不唯其香少、

とある。醬を塗ってから焼くと香りがつよいので、焼いてから塗ったものを海棠とよぶのである。無香の名花になぞらえてのことであった。別にまた海棠の名は、叢林においては詩の素材として親しまれた。五山僧がこれを詩に詠むのは、海棠が既に唐土において詩の素材であったからである。その用例は朝倉尚「禅林における賛海棠作品について」に詳しい。黄庭堅の詩に出る徐佺の故事（徐佺は海棠を護るために辛労した）、杜甫に海棠の詩無きこと、蘇軾の燭を焼いて海棠を照らすの故詩、玄宗帝が酔からさめぬ楊貴妃の姿態を海棠未開の様子に譬えたといわれること、それが「妃棠」という語を生んだこと、こうした海棠にまつわる故事、故詩がそれらの関係人物の名を冠して更に層を重ねて五山僧の詩嚢に入ったものである。例えば上の識語に桃源が渕材の名を出すのは、彭渕材の「五恨」によっている。鱗魚多骨、金橘太酸、蓴菜性冷、曽子固不能詩、海棠無香を五恨と名付けたことを知る知識が、詩に怨惜のこころを与える、そこのところで五山の詩は成り立っていた。渕材の名は田楽から海棠に至る小径であったことになる。酒を暖めて田楽を分ち合う山中の暮しというものは、海棠の重層的なイメージを共有することによって、詩画軸中の庵居へと昇華されうるのであって、海棠の名は彼らの情緒的共同体の性格を象徴する役割を荷っていた、ということでもある。周易の抄で田楽の作り方を詳述するのは、渕材の名が誘う故事故詩の世界に対する関心が手招く逆説であって、日常茶飯事における周到が部厚い観念を支える、ということであろう。青木正児の「陶然亭」一篇は、淮南遺法の看板を掲げた湯豆腐屋の話で、食味の背後に深い精神性を感じさせる佳品であるが、その淮南の豆腐を材料に、万里集九は次の如く詩に詠む。五山僧の手錬である。

一葦天寧師、見恵淮南之豆腐若干枚、蓋丹術之余破也、村田楽之中、以海棠為最矣、前暁値初雪、賦一篇及茲云、

雪初洒處豈成堆、吹入淮南丹鼎来、沈水染残海棠睡、不焼紅燭独挿寒灰

（新集六七七〇頁）

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

万里の場合も朱子の豆腐は漢淮南王劉安の術とする説に従うのであろうが、篠田統「豆腐考」はこの説を否定し、北宋以後の流行という（「風俗」昭和四十三年十一月）。ともかく、豆腐の詩題にも舶来性が伴なう。

なお東福寺僧彭叔守仙に桃源の田楽記事をふまえたらしい次の作品がある。『猶如昨夢集』に収める永正頃の作で、字句を踏襲する。

撥炉灰、立豆腐、因懐宋高宗卒之間、進豆腐亦可也之言、有感于懐也、所謂豆腐者、我桑域雖多調之科、無細無麁、専所用者、諺謂田楽也、截之作三四寸計、裂竹為串、塗醬為炙、其風味甚妙也、蓋其香襲人不消久矣、加之、引以到遠也、叢社于花于月哦詩句之輩、是以為怨也、近時有定一奇策者、未塗所擂醬之先、炙之、而入醬煑之、則其香浅也、故雅其名、曰海棠、豈又不風流也哉、寸紙之中記斯言、雖無其益、論之、以為戯焉耳（上、7オ）

その翌日の詠詩が次にみえる。

呼曰海棠名実賓、暗香細々不驚隣、炉談縦説旧情尽、堪咲断交光自貧

(35) 識語に「子舟育上人至自小田刈、当乱世居村庵、百事懶拙、将捨庵而去、発足在近云、余聞之愕然告之曰、人皆有病、余正上人同此病、今也緑林赤眉縦横塞路、就身打刦、寸歩亦艱、又何往之有、不如在東西二庵養其懶拙、而作主作主（賓カ）、与余同病相憐矣、語未畢、葉沙弥行行薬石而喫茶了」とする。子舟は永源寺龍安院の僧で、蘭窓元香の法嗣である。この後文明五年に洛に出て横川を訪ねている（『補庵京華前集』子舟字頌并叙）。

(36) 識語に「蓋于山上于高野、無老無少、皆党於賊、不有一人之知逆順之端者、不可不長大息矣」とある。既にみたごとく、桃源の仲弟が文明七年に東軍から西軍に志を替えたと『百衲襖』十八にあって、そのことを慨嘆したが、この時のことであろう。永享五年条参看。

(37) 一日から周易下経に入る。当初の予定では下経三十四卦は十一月十五日までに終る予定であった。識語に「此卦始十一月初一、然以有事故終有初六、余以為、下経三十四卦、其将畢功于除夕矣、今已延者四五日、加之或有他則決不能在今年之間乎、況又懶惰日益甚哉」とする。この年の冬至は十一月十六日である。文中の「以有事故」は、「小倉荘居住奉三宝弟子源五」（名未詳）の亡父のために作った法語のことを指すのかも知れない。桃源の所謂「世縁不浅」所以である。

(38) 十二月六日記の識語に顛末がのべられている。それによれば、十一月十五日に発病、七日の後（二十一日）全身に豆瘡が出て、それきり起てなかった。小尽の暁に逝去する。初七日に至る間は僧衆を催して三次結縁諷経し、午後には法華経を読誦、坐禅の後は光明呪を誦して中陰仏事を常の如く行なった。

(39) 南陽栄の請に応じて出した詩題は、雅青紙・狐白裘・琴裏賀若・頭上子瞻・因維那問竹・倩老僧保梅・人影月一盃酒・早午晩三景図・賦雪倣欧公禁體・忍寒読荆国新経の十題である。参加者は桃源の他に南栄（邀頭）、季玉承球、東川旭、文湖彦、錦溪異、春栄宗忻、東綿延、圭之藺、梅甫淑であったが、永源寺大亨瑞が代理に沙弥練江暉を送り、合せて十一人であった。各人が一題の詩を書いて筵中に出でて唱するのであったが、桃源と季玉は「以其老且禿、不足上人眼」ゆえに各々竹坡筠と松江とを代人に立て、東川の代を識廬庵の霖蔵主がつとめた。唱詩の順序は年少者から老者への順とした。各人の唱した詩題は、練江が鴉青紙、松江が狐白裘、梅甫が賀若、竹坡が子瞻、霖公が問竹、圭之が保梅、東綿が挙人影月之盃、錦溪が写早午晩之景、南栄が倣禁體、文湖が読新経であった。この日の桃源は及童の逝った後の久しぶりの詩会に心を開いた。乱中の一快、山林の盛事、千載の佳話、洛社の曩遊に劣らずとした。この詩会は在地の南栄陽が首唱して、おそらく費用も出したのであろう、邀頭を勤めた臨時の会であったようである。桃源が庵中の僧の詩学習のために毎歳年頭十日間十題の詩を詠せしめたことは後述する。桃源は独り周易を抄することに自足したのでなく、周辺の僧に諸書を講じたり、詩の指導にあたった。このとき桃源は永源寺山中の小世界でのすぐれた指導者であった。情強く他者の指南に耳を貸さぬと評された桃源の強い個性と学業が調和した、希有の一時期であった。(補4)

南栄陽侍者は、永源寺僧で山中で横川、桃源に従った。文明元年横川の『小補東遊後集』を横川から借りて抄写し、二月上旬、横川にこの写本の

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

ための序を求めた。「小補東遊集序」(『後集』所収)がそれである。さらにこの南栄抄写の系統本が現存することが知られている。玉村竹二「五山文学新集第一巻解題」によれば、大谷大学図書館蔵『小補東遊集』がそれである。『後集』の主要な文章の他に桃源の作品を中心に南栄周辺の僧の作品を収めたものである。この後半部分は、詩文集の残らない桃源の作をみる貴重な史料である(八一二九―一一五)。この内の横川の文に「南栄侍者々好学士也、余寓瑞阜無日不来、実旅中一歓也」とあり(22オ)、桃源の文に「南栄侍者々瑞阜佳衲子也、曾就叔父黄梅翁而学、途無遠近負笈以従、凡禅誦之暇、非書(カ)不看、非詩不言、実可尚矣、余与横川避乱寓于此、一笑如故、晨或而来、夕詠而去、日々以為常、客牖岑寂、慰藉不歩」(同)とするのによって交友の様子を伺う。応仁二年冬伊勢に赴き、帰りに伊勢在住の建仁寺僧某に餞詩を贈られた。帰山後、横川と桃源がこれに和韻した詩が先の序の後にみえている。この直後に蒲生郡に移った、文明五年春、縁者らしい照中居士の法事に曹源寺子真禅史が秉炬を勤め、桃源は他の仏事のために赴かなかったが、後日私第にこれを弔った。この時南栄の仏事の偈に和を求められてこれに応じている(36ウ)。

季玉承球は遠江村櫛庄の大沢氏の出で、海門承朝の直弟雲岩承慶の門に入っていたが、同じ夢窓派の横川に早くから師事したらしい。天陰龍沢に「次季玉少年試筆匂寄横川和尚」と題する詩がある。応仁の乱時に永源寺近傍に移ったらしく、山中で横川、桃源に近侍している。文明三年夏には一旦遠江に帰省し、その秋に再び山中に戻った。この時季玉の父が横川に法号を求めて、建中宗基の字諱を得ている(建中字説)。桃源の史記抄はこの季玉に講じたもので、横川が上洛した後の桃源のよき門人だった(後述)。文明十年には上洛していたらしく、同四月横川が等持寺に入寺するとこれに従って侍香を勤め、読書に励んだことが『補庵京華後集』に、

京之等持、夏月多蚊、長喙細身、飛而食人、未奈之何、季玉球蔵主、適侍予香、而紙帳銕繫、不廃読書、可嘉尚矣、一夕為豹脚所祟、耿〻不寝、戯題小詩、寄香案下、撃節惟幸、城陰古寺聚蚊窟、常夏如雷破柱然、糊紙補疇深警夜、焼糠閉戸薄籠烟、擺衣柳絮春風起、揮扇芭蕉秋雨懸、人不堪憂公独楽、書灯花落自無眠(新集一、三三七頁)

と戯詩にみえる。梅月斎という居室を構え、十四年十月に横川を茶に招いた(補庵京華続集)。十五年二月から十六年にかけて宮中や三条西実隆第などの連句会に加わったが、十七年四月十四日急逝した。横川の秉炬仏事法語に「収四十年才名於洛下」とあるので四十歳位だったらしいから、この頃はほぼ三十歳である。同法語に「侍横川如足如手已矣何在、学桃源有始有終嗟乎成空」とあって、二人が寵愛した後輩であった。

東川旭は、東福寺僧で、横川に従って近江に移った。文明四年、横川の上洛後も従って五年秋、別れて郷里に帰った。横川の餞詩に「恵日東川旭侍者、従予游有年矣、居江則江、居洛則洛、来往只書一束耳、癸巳秋(文明五年)、告別回里、与残署叙裝于此、与好風来帰于彼、其勢不可挽也」とある(補庵京華前集)。彦龍周興が次韻した。

春栄宗忻(清イ)は、近江愛智郡小田刈の人で松沢氏。『近江愛知郡志』第三巻に頂像あり。前建仁寺竺翁子舟の弟子で、師兄柏舟宗趙が曹源寺に入寺するのに従って近侍した。文明三年三月、横川に求めて春栄と立字された(『小補東遊続集』春栄字説)。のち横川の上洛に従って小補軒に移った。永源寺三四世。

東綿延は先の田楽記事にみえる僧で、文明六年九月二十五日条に桃源は延侍者の短檠を借り、同十月二十四日にも灯油を分けて貰っている。この頃桃源と梅岑庵中に同居して近侍したのであろうか。

文湖彦は、この後文明八年十二月に上洛して南禅寺冬節上堂秉払の様子を伝え、季弘大叔の返章と唐本庵事須知一冊の贈本を仲介している。

圭之藺は、文明七年十月二十三日の述懐によれば、専ら桃源の炊事役を買って出たらしく、桃源はこの人が学を志して自分に従い、桃源の教授する者が他にあるにも拘らず衆に代ってこれを勤めることに、深く感謝している。同十一月十七日の記によればその頭髪「已ニ縁禿ヲ帯ス」とあり、既に中年に至っていたであろう。同十一月九日には桃源のために曹源寺に赴いて新しく灯油をしぼらせている((百)十七)。この篤志に報いるために桃源はしばしば坡詩を講じてやり、その期待に違うべからざることを自戒

©1985 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)
The University of Tokyo

している（〔百〕十七）。文明八年十二月十四日に、梅岑庵を大掃除しているが、山中のどの庵に居住したのか不明である。あるいは梅岑庵に同居したのか。他に文明二年に亡くなった実翁従貞上座がもと鹿苑院行者であったのを乱中僧となって梅岑庵に居た。

梅甫淑は、曹源寺林際庵主で永源寺住持もした北溟元渭の門人で、北溟は文明八年五月に示寂したが、それ以前から桃源の許で諸学を教授された（百川学海中の茶経書写、聯珠指導、黄山谷詩の講義などが史料上に所見）。淑生、淑子とよばれ、北溟から没後の教導を託された。

霖上座は「識廬霖上座」とあるから（八一二九一六四）、識廬庵に横川の上洛した後居住したのであろう。文明八年四月八日、霖上座の紅糟聯句の首句「茶潔梅花脳」に対して、桃源は「糟紅麴米春」と対句した。

竹坡筠は曹源寺隣雲庵主睡足翁の門人で、後日桃源は筠少年のために餞詩を贈った（八一二九一一二〇）。

（補1）厳密には「未師行」は当時師伝がなかったことを指し、前漢書にもかつては師伝がなされたが、平安末以後に途絶えたものらしい。注（9）所引太田論文参看。

（補2）この本が現存する。書陵部架蔵の卅五冊本（四〇二・三）について『図書寮典籍解題　漢籍篇』は簡略で、文政年間に毛利高翰の献上した四十三冊本（四〇二・二）について詳述するが、この卅五冊本が近藤正斎の記述と合致するのである。版心刊記、匡郭、十行十九字の書誌的特徴はもとより、加点の様子も一致する。色はあせているが、青・黄・朱・墨・紫色の各点が付され、「竺点」付箋、桃源の『蕉雨史記抄』からの引用貼紙、瓠本との校合、注記引用等がみられて『附注』記事と合致する。ただ「文明三年」云々の貼簽が欠けるのが遺憾である。

しかるにじつはこの貼簽は正斎の閲覧した後に何らかの事情で誤って旧楓山文庫本前漢書（明正統八年翻宋刊本、卅七冊本）（四〇一・八八）の第一冊表紙裏に貼布されていたのである。最初の調査の時はそのことに気付かなかったが、後に平中苓次氏の論文「米沢の宋版前後漢書について」（『米沢研究と解題』所収）に、旧楓山文庫本の加点が米沢本と同じであることをのべて付簽のことに触れているのに気付いた。ただ氏が貼簽が本来この書に付されたものとみて『右文故事』の記述を誤りとされたのは、正斎の記事の方が正しい。旧楓山文庫本も帝紀に加点・振仮名等が集中的になされるが前記の色分けは全くみられない。卅五冊本の簽が誤ってこの本に貼られたとみて間違いないであろう。記事の内容は別に語彙的な記事が数行あることと、上の引用で傍記した文字の異同が若干あるほかは『附注』に引用する如くである。書陵部において両書を閲覧する機会を与えられた川田貞夫氏に記してお礼申上げる。

（補3）『百衲襖』の桃源自筆本は相国寺慈照院に伝蔵、大正中期上田萬年氏が東京帝国大学付属図書館長だった時、特別予算で『蔭涼軒日録』『鹿苑日録』原本と共に三浦周行氏が買求めて同館の有に帰したが、大正十三年の関東大震災で焼失した。それ以前に史料編纂掛の渡辺世祐氏が伝記に必要な部分のみを抄写して貼込原稿とした（大日本史料八一二九に翻刻収載）。他に建仁寺両足院に廿三冊本があり、昭和十四年玉村竹二氏が伝記に必要な部分を抄写、本所に入架したのが前者、上村観光氏が何れかから生前に識語を抜萃したのを謄写入架したのが後者である。

（補4）この小世界は、桃源らが大乱を避けて一時的に流寓した地であり、やがて京師が静謐すれば帰洛することを前提とした仮りの拠点であって、その意味での過渡的（境界的）性格を帯びるものである。ここでの諸僧は、中央官寺の水準からすればその社会的地位と修道の規格・素養において、実質的内容はともかく内外の衆目するところ構造的に相対的劣性を有するとみなされる世界であり、かつ近江においては中心的存在であってもなお中央京師との関係においては地方的な他所者的性格を有するのであった。これらの特性が内部成員に与える精神的結合の堅固さと高揚は注目すべきものがあり、ターナーのいわゆる「情緒的共同体」（コミュニタス）とよぶにふさわしい性格をもっている。桃源自身の日常生活における学問研究の真摯な姿勢と周辺諸僧の熱意は各注に具体的である。そしてこれらは大乱後の中央官寺での生活には稀薄化しつつあったところのものであった。